『天国への登り方』

作・広田淳一

2018/12/07–
2022/12/07–

前提

表記について

・　…間を取らない読点。

★　…前の台詞の語尾に重ねて言う。いわゆる喰い気味。

／　…間髪入れずに台詞の調子・方向性を切り替える。

＝　…この記号には二つの使用がある。一つ目は、語尾に「＝」が付き、続く行の語頭に「＝」が付く場合。この時は、間髪入れずに次の台詞が始まる。二つ目は語尾に「＝」がつき、行をまたいで同一人物の発言の語頭に「＝」が付く場合。この時は「＝」が付いた二つの台詞が、一人の連続した発言であることを意味する。この場合、必ずしも「間髪入れずに」発話されなくてよい。あくまで意味上の繋がりとして連続していることを重視し、むしろ一瞬の間があると考えた方が良い。

「　…ホチキス。近くにある同数のこの記号と同じきっかけで始まり、重なったまま発話される。必ずしも同時に開始される必要はない。

▲　…そでにはけながら言う。

▽　…言いながら登場する。

☆　…同じ数字の☆印を、同時に言う。

ト書きの「間」と「一拍」は、「一拍」の方が短い。

（このような）括弧内の文字は発話されない。

このような傍点付きの台詞は強調の意味。強調して発音するとは限らない。

演出の前提

◇台本に無い「被り」を増やしてもいい。

◇台本に無い「合いの手」を増やしてもいい。

登場人物

兵藤里砂　…体調の思わしく無い女。
兵藤健人　…その夫。
倉橋カオル　…里砂と健人の古い友人。
平山純　…里砂の妹。
平山葉一郎　…里砂と純の兄。
平山真由　…その妻。

籾木・ルナール・麻衣子　…ホッキョ区の医師。キツネと人間のハーフ。
村野大地　…その同僚。
増田結衣　…その同僚。
田辺美姫　…ホッキョ区の新人看護士。
八田兼続　…ホッキョ区環境協会理事長。
枢木玲子　…その妻。組織上は部下。嫁入りしたキツネ。
蜂ヶ谷正彦（キツネ）　…安楽死を待つキツネ。
蟹江（キツネ）　…その友人。
漆原（キツネ）　…悪戯好きのキツネ。
座間（キツネ）　…その仲間。

合計十六名（男：七　女：九）

プロローグ　まあまあ、悪くない

舞台上、いくつかの椅子が配置されている。

◎　リーディング

▼音響　曲in　客入れ音楽。

二人の俳優が入ってくる。

葉一郎　本日はアマヤドリ本公演、『天国への登り方』へようこそお越しくださいました。

倉橋　ありがとうございます。

葉一郎　えー、ご多忙の折、――縁起でもねえタイトルの公演にご来場いただきましたこと、厚く、御礼申し上げます。

倉橋　当劇場は、新型コロナウイルス感染拡大予防のため、十分な安全対策を行い、館内の衛生管理に努めております。会場内ではマスクの着用、消毒、咳エチケットにご協力ください。

葉一郎　客席内、携帯電話抑止装置を設置しております。

倉橋　上演中は携帯電話・時計のアラームなどをあらかじめ音の鳴らない状態にしてくださいますようお願い申し上げます。

葉一郎　――はい。大丈夫ですかね？　ねえ、もう、はい。――さて、本公演では、演出の都合上、非常口、誘導灯を消灯いたします。

倉橋　非常の際には点灯いたしますが、係員の誘導があるまで、慌てず騒がず、無駄な抵抗は止めてお席にてお待ちください。

葉一郎　なお、当劇場は耐震構造となっておりますので、まあ、――ね。少々のことではアレしません。

倉橋　というわけで、はい。こっからはちょっと、読みますね。

さらに何人かの俳優が登場。倉橋とともに、全員着席。台本に目を落とす。

ここからはリーディング。

倉橋　朝、布団の中で目を覚まして、――「なんだ夢か」と少し残念な気持ちになったあとで、「まあまあ、悪くない夢だったな」と、思うことがある。

葉一郎　――同じように。

倉橋　この人生が終わったあとも、悪くない夢だったな。ああ、「私」っていうコンテンツは、まあまあ、面白かったな、って。

葉一郎　――そう思えたらいい。

増田　たとえばそれが、ものすごい悪夢だったとしても。

純　あるいはかなり平坦で、ものすごーく退屈なものだったとしても。

増田　それは多分、その程度の話で。

兵藤　（立つ）朝、

一拍。

兵藤　君が目を覚ました時に、おはよう、と声をかける相手が近くにいるのだとして、――こんな夢だったよ、と報告する誰かが傍にいるのだとして、――君はこの夢を、どんな夢だったと報告するんだろう。

里砂　（立つ）まあまあ、悪くない夢だったよ。

兵藤　って報告するような、そんな夢にこれは、なっていたのだろうか？

里砂　まあまあ、悪くない夢だったよ＝

倉橋　＝（立つ。台本を見ず）演劇はいつでも、変身を扱うものです。舞台が始まってから終わるまでの時間で俳優も観客も二時間分歳を取り、始まった時とは別の状態に変身していきます。

八田　赤ん坊が生まれてから死ぬまでの時間が、――（立つ）まあ、たとえば七〇年なのか、五年なのかはわかりませんが、すべての赤ん坊は、――生まれた瞬間から成長と老化のスタート地点に立ち、いずれは「死体」へと変身してその一生を終えます。

倉橋　ですから、すべての誕生は、それぞれの赤ん坊が、それぞれの死体になるための変身の出発地点――とも、言えるわけです。

俳優たち、本を閉じる。

場面転換。

▼音響　ＳＥ　個人宅のチャイムの音。

兵藤　ああ、はいはいはい。

一幕　てぶくろをかいに

【一場】　兵藤の家

◎　作戦会議

兵藤健人の家に、倉橋が訪れる。兵藤の家はこじんまりとした作りの一軒家。

兵藤　ああ、来てくれたんだ。ホントありがとう。ホントにもう。
倉橋　うん、まあ、来いって言うから――。
兵藤　★ちょっ・ちょっ・ちょっ、カオルちゃん、あがってあがって。
倉橋　うん。意外と積もってたから苦戦しちゃったけど――。
兵藤　ああ、ね。どうぞ・どうぞ・どうぞ。

そこには兵藤の義理の弟（葉一郎）、その妻（真由）がいる。
二人はそれまで座っていたが立って倉橋を出迎える。
その後、真由は席を立って、お茶を淹れにいく。

兵藤　こちらはあの、リサと俺との共通の知り合いっていうか、友達の、倉橋さん。
葉一郎　ああ――。
兵藤　リサがなんか話をしてるんだとしたらカオルちゃんかな、って。あ、倉橋さんはカオルっていうんだけど、倉橋カオル。
倉橋　うん、まあ、（真由と葉一郎に）あ、倉橋です。
葉一郎　すみませんね、急にこんなことになっちゃいまして――
倉橋　いえいえ、そんな、
兵藤　こちらはあの、リサのお兄さん、
葉一郎　葉一郎です、
兵藤　と、その奥さんの、えー、奥さんの、あのー。
真由　真由です。
兵藤　★真由です。真由―。まあ、だからリサの義理の？　お姉さん／あ、ギリのお姉さん、ってことじゃないからね。ギリギリ姉ってことじゃなくて義理の――
倉橋　★わかってる・わかってる。
葉一郎　大丈夫でした？　お忙しかったんじゃないですか？＝
真由　＝ねえ。こんな年度末のバタバタした時に。（お茶を出しながら）どうぞこちら。
倉橋　ああ、すみません。や、まあ、別にそんな、ちょうど休みに入ったとこだったんで、
真由　ああ、そうですか。春休みといいますか？
倉橋　まあ・まあ・まあ、そんな感じで――

兵藤　（深刻に）や、もう、ホントにね。まったく急なことっていうか、なんていうかさ、なんでこんなことになっちゃったのかっていうのがあって、俺はもうドキドキがさ、胸のなに、さっきからずっとワクワク・ワクワクしちゃっててさ。

倉橋　ワクワク？

兵藤　ワクワク？　ワクワク違うな。いや、でも、さすがの兵藤の鉄の心臓もこのままじゃ心拍停止待ったなしか、みたいな？　そういう――。

倉橋　（やや呆れつつ）［ああ、はあ。

真由　（葉一郎に）［めちゃめちゃ動揺してんじゃんね。

葉一郎　［［そうねえ。

兵藤　［［いや、するでしょ、そりゃ！　そりゃするよ、動揺。ええ？　だって自分の奥さんが家出してんのに、「あっそう」とかいってたらそれはそれでもう、お前の血は何色だっていうかね、悪魔の血液かって。緑の心臓かっていうさ。

真由　（倉橋に）★え、え、あの、お話は聞かれてます？

倉橋　あ、はい。なんかさっき電話でちょっと――。

真由　そうですか。

倉橋　でも、あの、健人さんがなんていうか、――こういう状態だったもんで＝

真由　［ああ。

葉一郎　［ねえ。

倉橋　＝あんまりよくはわかってないんですけど。

葉一郎　★いやいや、僕も電話が来た時は、わけわかんなかったですから。

倉橋　――（一瞬、兵藤を見たあとで）でしょうね＝

兵藤　＝いやいや、でしょうね、じゃなくて。でしょうね、って、全然、わけはわかってたし、［今もわかってるし、

真由　［ねえ、ねえ、ちょっ、ちょっと、

葉一郎　落ち着きなって、健人くん。

兵藤　や、そうなんですけどね。落ち着かなきゃいけないんですけど、こんな時だからこそ、こういう立場なりゃこそね＝

葉一郎　そうそう。

兵藤　＝でも、わかっちゃいるけど落ち着いていられないというか、それどころじゃないというか、

真由　（制止して）ちょっとだけ静かにしてましょうか。

間。

倉橋　（葉一郎、真由に）まあ、簡単に言えばあれですよね、――里砂が家出しちゃったっていう？

真由　［そうです・そうです。

兵藤　［いや、んー、家出はちょっと簡単に言い過ぎだけどね、流石に、いくらなんでも、

倉橋　それってもう決まりなんですか？　だって今朝までここに、普通に居たんですよね？
葉一郎　そうですね、普通に＝
倉橋　＝だったら、このあとひょっこり帰って来たりとか？
葉一郎　ああ、いや、それがなんか、――手紙がありまして、
倉橋　手紙？
葉一郎　はい。簡単なメモみたいなものなんですけどね、
真由　★（兵藤に）健人さんあれ、どこにやりました？
兵藤　これ・これ・これ。

兵藤、一枚の紙切れを持ってきて倉橋に渡す。

倉橋　ありがとう――。（手紙を見て）なにこれ？　里砂が書いたの？
兵藤　そうそう。
倉橋　（不思議そうに）なんか、え、文字が崩壊しちゃってんだけど？
兵藤　んん？　そう？
倉橋　「そう？」じゃねえだろ。平仮名しかねーし、んん？　左手で書いたとか？
兵藤　うん・うん・うん。それはともかくさ、ね、ね（とにかく読んで、という仕草）
倉橋　読む読む。読むけど。

倉橋、手紙を読む。

倉橋　ああ、なんかでも、これだとちょっと家出っていうよりか、［んー
真由　［ええ、ええ。
倉橋　もうちょっと重い感じの文面ですね＝
兵藤　＝そうなの。無駄に重い感じの文面なんだよ。ズシーンと？　だからもう、こっちも動揺しちゃってるっていうか、（動きをつけて）ワクワク・ワクワクしちゃってさあ。
倉橋　うんうんうん。
兵藤　しかも、その手紙の上にスマホが置いてあって。もう金輪際、誰ともなんの連絡も取るつもりはないよ、みたいな。
倉橋　ああ、スマホ――。
兵藤　★いや、違うんだよそれでね、いや、違うの、違うんだよ。んー。――違うんだ＝
倉橋　＝何が違うんだよ。
兵藤　だからカオルちゃんに来てもらったのは、それで一緒にワアワア騒ぎましょうとかそういう話じゃなくて、わざわざ来てもらったのはだから、んー。（断定的に）なんか聞いてるでしょ？　いろいろと。リサから。
倉橋　――別に何も。
兵藤　★わかるわかる。わかるよ。それはね、言えないのはわかるんだけど、
倉橋　や、そうじゃなくて、

兵藤　いや、多少は、多少は聞いてるでしょ、大事なことを多少は、
倉橋　聞いてねーっていってんじゃん。
兵藤　いや、多少は、多少は聞いてるでしょ、大事なことを多少は、
倉橋　何もないって。ナッシング。
兵藤　いや、多少は、多少は聞いてるでしょ、
倉橋　★（葉一郎に）話が進まないんですけど＝
葉一郎　＝ねえ。
真由　あのー、倉橋さんは
倉橋　はい・はい？
真由　最後に里砂ちゃんとお会いになったのは――？
倉橋　やあ、最近は全然。もう、何年も会って無いですよ。あたしもちょっと仕事の方で忙しくしちゃってましたし、
葉一郎　［そうですか。
真由　［まあ、まあ、そうですよね。

一拍。

倉橋　え、でも、なんでまた急に、（手紙をチラと見て）「もう にどと あうことはありませんが――」って話になっちゃったわけ？＝
兵藤　＝だからそれがわかんないで困ってんだよ！
葉一郎　や、まあ、なんというか妹は多分――、（兵藤に）あ、いいよね別に？

兵藤、無言で何度か頷く。

葉一郎　多分妹はその、――死ぬつもりでいるんじゃないかな、と。
倉橋　死ぬ？　（言葉通りには受け取らず）ほほう、穏やかじゃないですねえ。
葉一郎　まあ、以前からそんなことを言っていたもんですから、まったく突然ってわけじゃないんですけど、
倉橋　え、え、比喩的なアレじゃなくて？　死ぬってだって、え、ホントに死ぬってこと？
葉一郎　そう、ですね。ホントに、っていう意味ですけど、
倉橋　★でもそんな話、全然あたしには／（兵藤に）え、どういうこと？　あんたもなんか聞いてたの？
兵藤　まあ、うん。
倉橋　あ、そう？　聞いてたんだ？
兵藤　まあ、だから可能性はゼロじゃないのかなって。
倉橋　え、あ、ホントに？　なんでそんな／んん？　え、え、なに、病気とか？
兵藤　いや、だから、順を追って話すよ。順を追って、
倉橋　うんうん、そうして・そうして。

一拍。

兵藤　順を追いきれない！
倉橋　★なんなんだよ。
兵藤　や・なんか混乱しちゃってて。ワクワク・ワクワクしちゃってて。
倉橋　はあ？
真由　じゃ、じゃあ、とりあえず今朝の様子っていうか？　そこから話してもらったら？
葉一郎　★あーあー、それがいいかもしれない。
兵藤　ええ？　今朝はだから――、まあ、すごく普通に？　何事も無いっていうか、むしろいつもよりちょっと幸せな感じっていうか、そういう雰囲気の漂う朝で。
倉橋　うんうん。

兵藤、立ち上がって今朝の様子を思い出すような雰囲気。

兵藤　俺がこう、ゴミを捨てる当番だったのね、今朝は。燃えるゴミを、まあ、朝、起きて、すぐに外に捨てて来てさ。そしたらなんか、ワーってなって、ワー、って。
倉橋　ワ・ワー？

いつからか音楽が聞こえてきている。
朝の回想に。

◎　朝の風景　その１　てぶくろかいに

兵藤の家の前。小さなキツネの行列。
それを観ている兵藤、キツネに雪（本物があればそれ）をぶつけられる。

兵藤　なあ、目が！　目が、ちょっ、取って。イタ、イッた！　目になんか、イッタ、目になんか入った！　イッテ・マジで。
里砂　なになになに？

里砂、登場。里砂はワンピースを着ている。

兵藤　目になんか入った。ちょっ、イッテ、見てみて。見て。
里砂　えー？　なにー？
兵藤　目、目になんか、入ってない？　目がめっちゃ痛いんだけど。

里砂、兵藤の目にゴミが無いかどうかを見る。何も見つからない。

里砂　――ないよ。

里砂、やっぱり何も見つからない。そのあと、窓の外を見る。

里砂　――あれ、あれ。

兵藤　ん？　なになに？

里砂の指さしている方を見る。

と、一面の雪景色。

里砂　ゆき。

兵藤　ああ、積もったね。珍しく。

一拍。

兵藤　ん、雪が何？

里砂　ゆき、ひかり。ゆき、ひかり。ゆき、ひかりー。

兵藤　ああ。雪の光で、目が？　ワ・ワーっと？　そうか――。

間。

里砂　いたい？

兵藤　いや、もう、まったく。

ふたり、笑う。里砂、兵藤を指差して笑っている。

兵藤　や、痛かったんだよ、ホントに！　急に来たから、刺激がこうさ、眼球を突き抜けるがごとく？

里砂、『てぶくろをかいに』の本を取りにいく。

兵藤　ん、なにこれ？

間。

里砂　［てぶくろをかいに。

兵藤　［てぶくろをかいに。

里砂　ゆきのひのあさに。キツネのこどもが、
兵藤　ああ、そうだったかも。『てぶくろをかいに』は確か、そんな始まり方だったかもね。
里砂　かって！
兵藤　ん？　買って、って、――ああ、手袋を？　リサぴょんに？

里砂、本を掲げて。

里砂　［てぶくろをかいに。
兵藤　［てぶくろをかいに。
里砂　かって！
兵藤　え・え？　いいよ、買うけど。――どんなのがいいの？
里砂　――にまんいじょうするやつ！＝
兵藤　＝価格優先？　ええ、そんな高い手袋ある？
里砂　ほっきょくでもつうようするな。――っていう。――レベルのやつ。
兵藤　本気（ガチ）のやつだ？
里砂　★ガチのやつだ。
兵藤　うーん。センスが問われているわけだね、俺の？
里砂　★センスがとわれているわけだよ、俺の。
兵藤　え、でもリサぴょんて、今日から帰省すんじゃなかったっけ、実家？
里砂　する。実家。帰省。
兵藤　んん、じゃあ、渡せないじゃん。
里砂　うん。わたせない。――わたせなくて、かなしい、俺のきもち？　――わかる。
兵藤　なんだそれ。

兵藤、笑う。

兵藤　わかったわ。北極にいっても汗だくになるぐらい、すっごい手袋買ってきてやんよ。
里砂　やんよ。やんよ。
兵藤　まあ、戻ってきたら楽しみにしててよ。
里砂　やんよ。やんよー。

里砂、無言で両手を広げてハグを求める。
兵藤、それに応えて里砂を抱きしめる。

◎　朝の風景　その２　お別れの挨拶

ふたりが抱き合っている間にキャリー・バッグを持った純が入ってきている。

純は小旅行に行くような出で立ち。コート着用。両手にギブス。

純　お取り込み中すみませーん。

兵藤・里砂、純を見ていったん離れるが、改めてもう一度抱き合う。

純　ええ？　ちょっと離れて離れて。来客だよ。

兵藤　やあ、純ちゃん。お久しぶり。

純　なんでしっかり確認してからもう一回、行けるかな――。仲がおよろしいことで。

兵藤　（照れて）ええー。いや、そんなことないって普通だよ。特別仲がおよろしいってことじゃないけどさ。

純　社交辞令・社交辞令・社交辞令です。

兵藤　ああ、そう。

純　社交辞令です。

兵藤　★何回言うんだよ。わかったよ。

純　――（ニヤり）

里砂　というか、（純の手を指して）なに、なに、なに？

純　ん、ん？　どうかした？

里砂　て、て、て。

純　あ、これ？　これはホラ、リスカ・リスカ。

里砂　［リスカー？

兵藤　［ええー？　なに、リスカしすぎて、こんなんなっちゃったの？

純　そうそう。予防も含めて？　もう、こんだけのギブスだと、ノコギリとか持ってこないと切れないから。頑丈だよー。いわばこれ外部化された骨格だからね。いっぺんこれで釘でも打ってやろうかと思ってんだけど。

里砂　打ってやろうかと思ってんだー。

純　いいっしょ・いいっしょ？

里砂　いいっしょ、いいっしょ。

兵藤　いやいや、こないでしょ、そんな場面。――ある？　そんな生活の中で、「あーもう、釘が打ちたいー。釘が打ちたいー。あ、キブスあるやんけ。カンカンカン！」みたいな？

間。

純　え？＝

兵藤　＝無いからそんな場面！

純　★あるよ！　犬小屋を建てたり、うさぎ小屋を建てたり＝

里砂　＝たてたり、たてたり、たてたり。

兵藤　いや、なんにもできないでしょ、そんな手じゃ＝

純、ギブスを外し。

兵藤　＝抜けるんかい。

純　（里砂に）え、もう、すぐ行ける？　出られる感じ？

里砂　うん。出られる感じー。

と、いいつつ里砂、部屋の奥へいったん退場。

兵藤　え、もう行っちゃうの？　お茶ぐらい飲んできなよ。

純　いいの・いいの。いったん落ち着いちゃうと出るの大変だから。

兵藤　や・だけど、

純　寒いしな。

▽里砂　（上着を着ている）さむいしなー。

兵藤　まあ、じゃあ、うん。なんだ――みなさんによろしく。

純　――（里砂に）いいの？　（ハグの仕草）これはもう？

里砂　ん？　ああ、じゃあ、じゃあ。

ふたり、ハグ。

里砂、純、退場。

舞台上、里砂を抱きしめた格好のままの兵藤が残される。

◎　出発と随伴　その１

兵藤　それで俺も仕事行って、――帰ってきたら、手紙とスマホが置いてあって。

倉橋　はいはいはい。

葉一郎　僕がさっきその、妹が死ぬつもりなんじゃないか、っていったのはですね＝

倉橋　＝ええ、ええ。

葉一郎　もう、三年ぐらいになるのかな？　ずっと悩んでたんですよ、病気のことで。

倉橋　ああ、病気？

葉一郎　はい＝

倉橋　＝え、里砂なんか病気だったんですか？

葉一郎　――ご存知ないですか、何も？

倉橋　はい。何も――。ああ、なんか、悪い感じの？

葉一郎　まあ、――癌。

倉橋　癌――。え、それは、あの、結構進んだ感じの？　ど・どこの癌、なんですか？

葉一郎　んー、僕もあんまり、詳しいことはわからないんですけどね、

倉橋　はい。

葉一郎　なんでも、言葉の癌ってやつらしいんです。
倉橋　言葉の癌？　ていうと、それはなんか声とか？　そういう、声帯が悪く［なるっていう？
葉一郎　［いやいや、そういうのじゃなくて。
兵藤　体の癌じゃないんだよ。だんだん言葉がわからなくなっていって、単語が出なくなっていったりしてさ。この頃は読んだり書いたりも難しくなってきたみたいだし。
倉橋　ああ、それでさっきの手紙もあの――？
兵藤　うん。そうだね。
倉橋　それは、――どうなるっていう話なの？　最終的には。病気が進んでっちゃったらさ？
兵藤　んー、進んでいったらそれは、
葉一郎　癌、ですからね、まあ、そりゃ――。
倉橋　ああ。――え、でも、とりあえず今は実家に帰ってるわけですよね？　だったら連絡取ってみたら＝
真由　＝ああ、実家には帰ってないんです。さっき連絡してみたんですけど、なにも聞いてないって。
葉一郎　もともと帰る気なんかないんです。
倉橋　ああ、そうなんですか？
葉一郎　ええ。下の妹はもう何年も実家には帰ってないですし＝
兵藤　＝ああ、何年も？
葉一郎　うん。そもそも里砂はそんなに父とは縁が無いですし。ああ、うちはもう母が亡くなってるんで、父の一人暮らしなんですけどね。離婚したりなんだったりでちょっと関係が複雑でして――。
倉橋　じゃあ、今、リサがどこにいるかは全然わからないってことですか？
葉一郎　いや、全然、ってわけじゃないんですが。

間。

真由　多分、里砂ちゃんはホッキョ区に行ったんじゃないかと思うんです。
倉橋　北極？
真由　いや、違いますよあの、地球のてっぺんの方じゃなくて、地区で、あるじゃないですか？
倉橋　なになに区、みたいな。
真由　ああ、ホッキョ区。
真由　はい。あたしは里砂ちゃんよりはむしろ義妹（いもうと）の、純ちゃんとお話する機会が多かったんですけどね、まあ、あの子はあの子で、そういう、生きる意欲みたいのが薄いほうでしたから――。だから、ホッキョ区に行ってそれで、いい感じのところでぽよーんと消えちゃいたい、みたいなことはよく言っていましたし。

葉一郎　ホッキョ区はそういうのが充実してるんですよ。施設とかもそうですけど、制度的な問題として、安楽死が認められていて。
倉橋　安楽死。
真由　まあ、あの子の思いつきそうなことではありますから。
倉橋　そう、ですか。
葉一郎　それで今、僕と健人くんでホッキョ区に行ってみようか、って話になってまして。迎えに、といいますか、探しに、といいますか。
倉橋　（兵藤に）え、どう思ってんの兵藤は？　あのー、なに？　このあと里砂が元気になっていくっていうかさ、そういう、回復していく可能性に関しては？
兵藤　んー、それはなに、完全に元通りになるって意味？
倉橋　まあ、そう。元気になる感じで？
兵藤　それは、無いらしいよ。だから、ゼロだね。
倉橋　ゼロ？
兵藤　うん。それは結構、念を押すみたいな感じで、医者にはっきり言われたから。

間。

倉橋　（少し落ち着きを取り戻して）でも、えー。意外だな、里砂がそんな――。
兵藤　ねえ。病気とか全然しないやつだったのに。
倉橋　や、そうじゃなくて。仲良かったじゃない、君ら？
葉一郎　［そう、ですね。
真由　［はい。とっても。
兵藤　――ん？　ん？
倉橋　だからこんな風に、あんたにも相談しないで、っていうのがなんか――。
兵藤　ああ、それは――俺の問題もあるんじゃないかな。
葉一郎　［いやいやいや、
倉橋　［え、え、そうなの？
葉一郎　ああ、いや、なんていうんですか、健人くん、ものすごく苦手だから、その、死に関することが。
倉橋　死に関すること？　っていうと、お葬式とかそういう――？
葉一郎　［そうです・そうです。
兵藤　［もう全然ダメ、全然ダメ。行ったこと無いもん、お葬式。人生で一回も。
倉橋　ええ？　だってそういう、あったでしょ、タイミングが？
兵藤　あったけど。もうでも、全部避けてきて。
倉橋　なんで？
兵藤　なんでって、――怖いじゃん。
倉橋　ええ？　なにが？
兵藤　え、もう、全部。なに、死ぬっていうこと全般。雰囲気とか、全部含めて。

倉橋　そんな子供じゃないんだから――、
真由　（葉一郎に向けて笑って）あん時もちょっと問題になったもんね。
葉一郎　［ああ、ねえ。
兵藤　［ああ、いや、その節は本当にご迷惑おかけしちゃって、
真由　いやいや、いいんですけどね、
葉一郎　（倉橋に）や・なんか、健人くん、母の葬式の時も欠席しましてね。
倉橋　――なにやってんのあんた。ええ？
兵藤　や、違うんだよ。違うんだ、［違うの。
倉橋　［違くねえ。あんたが違うと言う時、それは違くねぇ時だ。
兵藤　全然もうさ、いや、俺も流石にリサのお母さんだし、いろいろとお世話にもなってたし？　これは行かなきゃだろっていうのはわかってたんだけど。でも、急だったし＝
倉橋　いやいやいや、
兵藤　＝ホント突然ていうか、前ぶれ的なものがなかったから、ええ？　ってなっちゃって。ド肝抜かれちゃって、ド肝。ド肝？　え、ド肝って、なに？
倉橋　知らないよ。
兵藤　だからそう、――リサが癌ってなった時も俺、完全に思考停止しちゃって。もう、なんか会社とか行けないぐらいの？　ずっと何も手につかなくなっちゃって。
倉橋　［うんうん。
葉一郎　［そりゃそうだよ。
兵藤　だからふたりでさ。話し合って。というか、リサが一方的に提案してくれたって感じなんだけど、もう、病気の話はやめようって。そういう、死んだらどうなるとか、死んだらどうする、とか、そういう話は全部やめにしよう、ってなって。
倉橋　――うーん。
兵藤　そうなんだよ！　頼りない。頼りないよねー。そういうさ、一番、俺がしっかりしてなくちゃいけない／なんだったら支えてやれよ！　みたいな、そういう場面だよな、ってことはわかってたんだよ。だって一番怖いのは誰がどう考えたってリサじゃん？　でしょ？
倉橋　まあ、まあ＝
兵藤　＝病気になったのは俺じゃないし。俺は元気だし。だけど、もうめちゃくちゃ怖くて・怖くて。どうにもなんなくなっちゃって・だから、――そういう、なんだ、リサが何も言えない感じにしちゃったんだと思う。俺がね。

一拍。

真由　まあ、でも、ね。だからこそ、ホッキョ区まで行ってちゃんとお話をしようって話になってるわけでしょう？　今＝
葉一郎　うん・うん。
真由　＝それはそれで、健人さんなりにがんばってると思いますよ。
兵藤　――そうすかね？

真由　や、もう、絶対そうですって。ねえ？＝
葉一郎　＝えらいと思うよ。あんなに怖がってたのに立ち向かって。

一拍。

兵藤　うん。まあ、――がんばってはいる。
真由　［ね。ね。
葉一郎　［がんばってるよ、ホント！
倉橋　（ふたりに）あんまり甘やかすなよ。（兵藤に）え、え、じゃあもうさ、兵藤がホッキョ区に行って止めるって話なんだよね？　安楽死。
兵藤　や、まあ、うん。そういうことになんのかな。
倉橋　――なに、その中途半端な感じ？
兵藤　いや、だって、会えるかどうかもわかんないし。
倉橋　なに弱気なこといってんの？
兵藤　や、止めるよ。そりゃ俺だって絶対止めたいけどさ――。
倉橋　当たり前でしょ？
葉一郎　いや、でも僕の立場としてもその、必ずしも止めるって話ではないんです＝
倉橋　＝なんでよ？
葉一郎　とにかく、ちゃんと話をしておきたいな、っていうだけで。
兵藤　だから俺も、――リサと会って何を話せばいいのかとか、そういうことは全然、わからないんだけどさ、
真由　肝心のその、「お話をする」っていうのがしんどい状況なんだと思いますしね。

間。

葉一郎　それじゃどうかな、健人くん？　倉橋さんが何も聞いてないっていうことだったら、これ以上付き合わせちゃっても悪いしさ、
兵藤　［ああ、
倉橋　［いやいや、あたしは全然いいんですけど、
葉一郎　とはいえ、うちの家庭の問題、っていう部分もありますし。
兵藤　うん。まあね。それは――。
葉一郎　倉橋さんにはまた、状況分かり次第ご報告させていただく、っていうことで。
倉橋　あたしも行っちゃダメですか？　一緒に。

一拍。

倉橋　できれば、あたしもそのホッキョ区っていう所に一緒に行って／いや、急に何言ってんだ、って感じかもしれないですし、お邪魔かもしれないんですけど・でも、――このままなんか、会えないままになっちゃう、っていうのは絶対にイヤだな、っていうのがあって、

葉一郎　お気持ちは嬉しいんですけど、――何日掛かるかもわかりませんし、

倉橋　ああ、なんか予定とかは全然、あたしは大丈夫なんですけど、

葉一郎　や、でも、お仕事の都合だってあるでしょうし。

真由　ねえ。

倉橋　や・無いんです、無いんです。お仕事の都合なんて。（兵藤に）というか辞めたんだよ、仕事。ちょうど、こないだの年末で。

葉一郎　［えー。

真由　［ああ。

兵藤　辞めたって、え？　なんで？

倉橋　なんでってこともないんだけど――。今まであんま言いたいこと言ってきた人生じゃなかったから？　ここはいっちょ言ったろかー、と思って上司に全部ぶちまけて。なんか、その勢いで辞表叩きつけてきてやってさ。だからちょうど今、ヒマしてんだよ。

兵藤　え？　よ、良かったの、それで？

倉橋　いいの・いいの。その気になりゃまたすぐ仕事なんか見つかるし。

兵藤　うーん。違うね、やっぱ資格ある人は。

真由　（倉橋に）ああ、何か資格をお持ちで？

倉橋　ええ、まあ、一応。

兵藤　会計士。

葉一郎　凄いじゃないですか。

真由　［ねえ。

倉橋　［いやいや、大したことじゃないですよ――。とにかく、リサも心配だしさ。手伝うよ。いろいろ。

間。

葉一郎　じゃ、じゃあ、まあ。

兵藤　お願いしようかな、そしたら。

倉橋　うん。お願いされる。

◎　一次受付

舞台上、別の場所。診察室。
医院側の人間、村野、田辺がいる。また、里砂、純もいる。
里砂はコートに加えて、暖かそうな帽子を被っている。

田辺　身分証お預かりします。
里砂　ん、ん？
田辺　身分証を。
里砂　かびん・じょうろ？＝
田辺　＝（冷静に）言ってません。身分証を。
純　ああ、今、出します。身分証。

ふたり、身分証を探す。

ルナール　それと、複数の医師による診断書・同意書が必要になるんですが――
里砂　ふくすうのミシンによるぜんもんどう？＝
田辺　＝言ってません。
純　ああ、今、出しますんで。（里砂に）いいからさ／あの、これと、これですかね。
ルナール　なんですか、ミシンによる禅問答って。

純、二人分の身分証、ファイルを預ける。

ルナール　いったんお預かりしますね。
純　ああ、はい。

田辺はいったん席を外す。

村野　それじゃ簡単な確認から――。
里砂　［あ、はい。
純　［お願いします。
村野　それぞれ、お名前は？
里砂　ひょうどうりさです。
純　平山純です。
村野　それでお二人は、何をしにホッキョ区にいらしたんでしょう？
純　もちろん、安楽死を希望して。
村野　結構です。――（真剣に）あなたがたは誰からも強制されず、あなたがたご自身の意志によって、安楽死を行おうとしている。――間違いありませんね？
純　［間違いありません。
里砂　［まちがいありませんね。
村野　結構です。ちなみに、お姉さんの方はこれは――、
里砂　［はい。
純　［なんでしょう？
村野　（里砂にだけ）パートナーの方のご同意は――？

里砂　えー、ああ――。
純　必須じゃないですよね？　家族の同意って？
村野　ええ、もちろん。御本人の意志が最優先ですが＝
純　＝ですよね。じゃあ＝
村野　＝ただ、あとあとになって揉めたりすると、ね？　お互いすっきりしないでしょう？
里砂　てがみ、
村野　はい？
里砂　わたし。てがみ。わたし。てがみ。
村野　ああ、お手紙でここでのことはちゃんとお伝えになっている、と？
純　（割って入り）はい。ですから、のちのち揉めるようなことにはならないかと。
村野　――そうですか。

ルナールが戻ってきている。

ルナール　こちら、お返ししますね。
純　ああ、どうも。

ふたり、受け取る。

村野　では、――どういった最後をお迎えになるかについてなんですけどね、大枠、それがふたつに分けられるんです。
純　はい。
村野　ひとつは、最後までご自身で薬剤を注射していただくなり、飲んでいただくなりする、っていう方法。
純　はい。
村野　もうひとつは、看護士なり、医師なり、自分以外の誰かに手伝っていただくという方法。
純　介助自殺なのか、積極的安楽死なのか、ということですかね？
ルナール　そうそう、自殺か、他殺か、というね＝
村野　＝止めてください、そういう語弊のある言い方は。（ふたりに）大枠で、どちらをご希望になりますか？
純　あたしは、誰かにやってもらうほうがいいかな。
ルナール　あ、他殺希望、と。
村野　第三者による関与があったほうがいいですか？
純　はい。最後、ビビっちゃいそうなんで。
村野　んー。お姉さんはどうしましょう？
里砂　わたしは、わたしで。
ルナール　うん。自殺希望、と。

村野　ご自身によって最後まで、ということですね？
里砂　はい。
村野　結構です。それじゃ審査の間、一週間から十日ぐらいはホッキョ区に滞在して、まあ、言ってみれば順番待ちをしていただくことになるかと思います。
田辺　どうぞのんびりなさってください。あちこち観光名所もございますんで、
純　ああ、観光名所――。
田辺　ええ。この時期は梅がきれいですし、
里砂　わたし、
村野　はい？
里砂　はやく。――はやく。
ルナール　――なるべく早いタイミングをご希望でしょうか？
純　ええ、なんか割と、苦しいみたいで。
ルナール　――（純に）考慮しておきます。
純　はい。ありがとうございます。
村野　それじゃ田辺さん、ご案内して差し上げて。▼
田辺　はい。あ、どうぞこちへ。

みな、移動し始める。

▲田辺　お二人は初めてですよね、ホッキョ区？
▲純　そうですね。
▲村野　（笑って）そりゃそうでしょ。
▲田辺　ちょうどいいですよ、今は。いろいろとおいしいものもありますし。
▲ルナール　キツネの行列なんかもありますしね。
▲里砂　キツネの？
▲純　なんですかそれ？

◎　出発と随伴　その２

葉一郎　（真由に）それじゃ、子供たちのこととかさ、任せっきりになっちゃって悪いけど、
真由　こっちこそ、純ちゃんだけはお願いね。
葉一郎　うん？
真由　あの子はだって、里砂ちゃんとは違って、まだまだ元気なんだしさ。絶対、連れて帰ってきてよ？
葉一郎　わかってる・わかってる。まあ、絶対とは言えないけど、そんな。
真由　★ええ？　なんで？
葉一郎　もちろん、そのつもりだよ？　そのつもりだけどさ、でも、向こうの考えもあることなんだから、わからないでしょ、だって。

真由　――染まって来ないでよ・ヘンな、向こうで。
葉一郎　なに、染まるって？
真由　とにかく、キツネに化かされたみたいになって帰って来ないでよ。
葉一郎　ならないよ、そんなことには。
真由　どうだか。油断してたらすぐですよ。そんな、安楽死特区だなんてヘンなのがいっぱいるんだから――。
葉一郎　わかった、わかった。用心していってくるよ。

キツネの行列が始まる。
場面転換。

二幕　ホッキョ区サロン

【一場】　ホッキョ区の街路

狐の行列のシーンが過ぎ去る。

◎　行列　その１　寸止めデンジャラス

路を歩いている倉橋、兵藤。雪が降っている。

兵藤　ああ、今、ああ、ああ！
倉橋　なになになに、どうしたの？
兵藤　リサぴょんが居た！　リサぴょんが！　［リサが居たよ！
倉橋　［ええ、どこどこ？
兵藤　ホラ、あそこ！　あそこに混ざって！
葉一郎　あれ、純もいるんじゃない？
兵藤　どこどこ？
葉一郎　ホラ、となり、純だよね？
兵藤　ああ、純ちゃんだ！　純ちゃん！
葉一郎　おーい、純！
兵藤　リサー！　おーい、リサ、リサー！　リサー！
倉橋　ちょっ、うるさ、――ちょっと静かにした方がいいかも。

と、行列から漆原・座間が出てきて話しかける。

漆原　ちょっと・ちょっと・ちょっと。
座間　静かにしてろってんだよ。厳粛な儀式なんだから。
倉橋　ああ、どうもすみません。
葉一郎　いや、でもなんか、
兵藤　僕の妻が！　妻がいるんです！　リサが！
漆原　あんたの妻がなんなんだい？　行列に参加してるってだけだろ？
座間　別に騒ぐようなことじゃねえ。
兵藤　まあ、まあ、そうですけど、
倉橋　え、とりあえず付いていってみようよ。一緒にさ。
兵藤　ああ、そうかそうか。そうしよう。
漆原　ダメ・ダメ・ダメ、そんな冷やかしの人は。
座間　厳粛な儀式なんだから。
倉橋　すみません、静かにしてますんで、

兵藤　はい・はい、だから、
漆原　★ダメだっていってんだろ、そんな。
倉橋　いいじゃないですか、別に。
葉一郎　お願いします、そーっと、そーっと付いていきますんで。
漆原　んー、そうっとねえ？　（座間に）おい、どうするよ？
座間　なんだったらあれか、参加してっちゃう？
漆原　ああ、そうか。行列に参加するっていうんなら――。
座間　な？　じゃあ、ホラ。このお面を被って、参加者の一人ってことにすんなら付いていけるぜ？
倉橋　ああ、はい。被ればいいんですね？
座間　おお、パクッと。
兵藤　え、でも、いいんですか？　厳粛な儀式だってさっき、
漆原　大丈夫・大丈夫！
座間　うん、ちょっと走ったらまだ追いつけるな。
漆原　さあさあ、被っちまいな！＝
座間　＝被っちまいな！
兵藤　――それじゃあ、まあ、
葉一郎　［はいはいはい、
倉橋　［あたしも・あたしも。

兵藤、葉一郎、倉橋、キツネの面を渡され、被ろうとする。
どこからか、ルナール・田辺、登場。

ルナール　ちょっと失礼、ちょっと失礼。
兵藤　おお、なんですか。
ルナール　大丈夫なんですか？　本当に参加しちゃって？
兵藤　大丈夫もなにも、追いつかないといけないから。
田辺　みなさんも、安楽死をご希望なんですか？
兵藤　あ、え？　え？
葉一郎　安楽死？
田辺　はい。この行列に付いていく人はみんな、安楽死をご希望の方ですよ。
ルナール　みなさんもご希望になるんですか？
倉橋　あ、そういう、これはそういう行列なんですか？
ルナール　ええ。軽々しく参加するもんじゃない。
田辺　ダメですよ、この辺は悪いキツネがいっぱいいるんですから。
座間　それじゃ、俺たちはこの辺で――
漆原　あたしも、あたしも、

漆原・座間、退場しようとする。
ルナール、座間を捕まえる。田辺は漆原を捕まえている。

ルナール　あ、ちょっ、待ちなさい！　［待ちなさい！
田辺　［逃げるな・逃げるな！
座間　ちょちょちょ、離せよ・離せよ、
田辺　あんたらねえ、人間を騙すならもうちょっと場所を選びなさいよ。
座間　（笑）はい、今後はよくよく考えた上で、はい。
田辺　いつもそんなことといって！
ルナール　もうもう、早く行った方がいいよ、ね、ね。
漆原　ハイ、どうもすみません。

漆原・座間、退場。

◎　行列　その２　ビー・ケアフル

葉一郎　キツネに化かされた――。
兵藤　あるんですね、こんなこと。
倉橋　ね・ね。

ルナール、何か落としたものを拾って

ルナール　これはどなたかの？
倉橋　ああ、あたしだ。ごめんなさい。
ルナール　――危ないところでしたね。
田辺　こんなところで、どなたかお探しですか？
倉橋　はい。や、あたしっていうよりはこっちの、彼がちょっと、
兵藤　ああ、僕がその、そう、妻を探してまして、
ルナール　へえ。そうなんですか。
田辺　どうか冷静にお願いしますね。
兵藤　はい？
田辺　さっきは随分興奮なさってたんで、
兵藤　ああ、すみません。
ルナール　会って、どうなさるんですか？　妻に。
兵藤　どう、って別に――、だから――、お話をして、
ルナール　それを妻が望んでいらっしゃると？
兵藤　いや、それはまあ、はっきりはわからないですけど、

ルナール　ほー、それじゃあ、なんですか？　ひょっとすると、絶対に会いたくない、と思ってるかもしれないわけですか、妻は？
兵藤　いや、でも、僕はお話をしたいと思っていて。ちゃんと。
ルナール　なるほど・なるほど。
田辺　他の方は付き添いですか？
倉橋　や、まあ、はい。
田辺　ご家族かなにか？
葉一郎　ええ、まあ、
ルナール　いやねー、このあたりは、死にたくても死なせてもらえない方が、たくさんいらっしゃる地域になってましてね＝
兵藤　＝ああ、はい。
ルナール　せっかくここまで来たっていうのに連れ戻されちゃう方も結構多かったりして、だから思うんです。――手助けしている我々ぐらいは、ねえ？　あくまでここを訪れる方の、御本人の希望を最大限に尊重してあげたい、せめて自分らしく死んでいく自由を守って差し上げたい、って。
兵藤　でも、死んでいく自由なんて、そんな――
田辺　ここはそういう地域なんです。キツネたちと、人間と。仲良く暮らして、自分らしい最期を迎えられるように、って。
兵藤　それはちょっと、危ない考えなんじゃないですか？
ルナール　危ない考え？　それじゃ、なんですか、自分の好きな時に好きなように死ぬ自由、そんな権利なんかねえと？
兵藤　いや、まあ、そういう、権利とかはわかんないですけど、
ルナール　いいですか！　――自分らしく生きること。自分らしく死ぬこと。これは、別のことじゃありません。ひとつのことです。
兵藤　だから僕は単に、いや、連れ戻すとかじゃなくてその、お話をしたいっていうだけで。
田辺　ええ、ええ。しっかりお別れをなさりたい、ってことですよね？
兵藤　はい／いや、お別れになっちゃうのかどうかもまだわかりませんけど――。
ルナール　（倉橋に）ところで――ホテルはもうお決まりですか？　宿泊先は？
倉橋　ああ、はい、
ルナール　じゃあ、何日かご滞在になるわけだ？
葉一郎　まあ、一応、会えるまでは――。
ルナール　そんじゃどうです？　よろしければ、うちの医院に遊びにいらっしゃいませんか？
田辺　（ルナールに）ちょっと！　いいんですか？　そんな、
ルナール　大丈夫ですって。（倉橋らに）え、どうです？
倉橋　んー、（兵藤・葉一郎に）どうしよっか？
葉一郎　まあ、これといってアテも無いしなあ。
ルナール　ああ、申し遅れましたがワタクシ、この地域で医師をしております、樅木・ルナール・麻衣子と申します。

倉橋　ルナール＝
葉一郎　＝クドい――。
ルナール　なんだったらそちらの妻をこちらで探してさしあげましょうか？
兵藤　えっ、ホントですか？
ルナール　ホントです・ホントです。（自分を示し）これでいろいろと顔が効きますから。
倉橋　（兵藤に）おお、やったじゃん。
兵藤　（ルナールに）ありがとうございます。
ルナール　ただ、その前にいろいろとお話しましょう。それじゃ田辺さん、ご案内して差し上げて。
田辺　はい。――それじゃ、こちら、すぐ裏手にございますんで。みなさん、お荷物をお持ちになってください。
葉一郎　［ああ、はい。
兵藤　［ありがとうございます。

田辺、先頭を歩き、兵藤、葉一郎、付いて行く。

◎　行列　その３　倉橋、ルナール

倉橋もそれに付いていこうとするが、スーツケースの中身をぶちまけてしまう。

倉橋　ああっ！　うわ、マジか――。あ、えー。

ルナール、少し戻ってきて、

ルナール　手伝いましょうか？
倉橋　ああ、すみません、ホントもう。
ルナール　あーあー、こりゃ酷い。
倉橋　ねえ、ホントごめんなさい。
ルナール　わかりますよ。一刻も早くくつろぎたかったんですね。
倉橋　そんなわけ！　いや、すみません、なんか。
ルナール　（からかって）――そんなわけ！

倉橋、ルナール、目が合う。
倉橋、再び片付け始める。
ルナール、倉橋のブラジャーを持って、

ルナール　結構、がっちりした下着ですね。
倉橋　★ちょ・ちょ・ちょ、なにやってんですか！　はあ？

ルナール　やっぱりホールド力が違いますか、ワイヤーがしっかり入ってると？
倉橋　★返してくださいよ。止めてください。
ルナール　はい・はい・はい。――そんな見られて困るような下着で来ないでくださいよ。
倉橋　★いや、下着なんてそんな、――見せるもんじゃないでしょ！
ルナール　★自分が路の真ん中で広げたんじゃないですか？
倉橋　★広げたんじゃないですよ、開いちゃったんです！　ごめんなさいね！
ルナール　ハハハ。ひょうきんなお方だ。
倉橋　そういうんじゃねえから、別に。
ルナール　大丈夫ですよ下着ぐらい。こっちは常日頃、皮膚の内側まで開けて見ているわけですから。

倉橋、片付け終わる。
ルナールがキャリーバックを立ててやる。

ルナール　あなたもご親戚かなにか？　彼の、妻の。
倉橋　いえ、じゃなくて。まあ、友人的な、アレなんですけど。
ルナール　ああ、なるほど。親友ってわけですか？
倉橋　まあ、親友、かどうかはわかんないですけど――。
ルナール　あ、もしかして、元恋人っていうセンですか？
倉橋　いや、――わかんないっていうのはだから、まあ、何も言われてないですしね、こんな時に。だから、親友ってことでもなかったのかな、って。こっちだけ、そういうつもりになってたけど、っていう。
ルナール　ありますよね、そういう、向こうではこっちのことなんか何とも思っちゃいない、というね？
倉橋　さっきからちょっと、――え、ワザとやってます？
ルナール　ワザと？
倉橋　なんかムカつくんですけど。
ルナール　ああ、よく言われます。
倉橋　でしょうね。
ルナール　ええ。しょっちゅう、ぶっ殺す、とか、死ね、とか言われてますんでね。

ルナール、倉橋とキスをする。ちょっとだけ長め。

倉橋　えー。どういうこと？
ルナール　▲そんじゃ、そろそろ行きましょうか？　イチャイチャしてたことがバレますよ。
▲倉橋　イチャイチャってそっちが一方的に／えー？　なんなのホントあんた。
▲ルナール　いや、手伝ってあげたんじゃないですか。バカみたいに荷物ブチまけてたから、
▲倉橋　バカみたいは余計でしょ！　ハイハイ、大変お世話になりましたねー。

場面転換。

【二場】　ルナール医院

翌日の午後。
ルナール医院。応接間兼診察室。

◎　医院にて　その１　来院

▽音響　曲out　医院にてのテーマ

診察室の上手、事務机の前に村野がいる。
下手側、応接机の周りに、車椅子に乗った蜂ヶ谷。
それを補佐するように八田、枢木がいる。
そこへ、田辺、葉一郎、兵藤、登場。

田辺　ただいまー。
八田　おつかれーす。
田辺　（近づいて）わあ、八田さん、玲子さんもお久しぶりです。
枢木　お久しぶり。どう？　もう慣れた？
田辺　はい。あ、そっか。今日サロンの日でしたっけ？
八田　そうそう。たまにはちゃんと出ておかねーと、と思って。
蜂ヶ谷　もう次はねえからな。
田辺　（歩み寄って）蜂ヶ谷さんも、
蜂ヶ谷　しばらくだね。
田辺　ええ、先週以来。お加減、いかがです？
蜂ヶ谷　――まあ、ここ何時間かは持つんじゃねえ？
枢木　また、そんなこと言って。サロンもあるし、ホラ、今日は生前葬の準備があるから。
田辺　ああ、パーティの！　そうか、そうでしたねえ。
八田　大変だよ、蜂ヶ谷さんのダメ出しがキツくって。
蜂ヶ谷　杜撰な計画を練り直してやってんだろうが。
田辺　（蜂ヶ谷に）だいぶ顔色もよくなって。
蜂ヶ谷　んん、土俵際の粘り？
八田　［なんすかそれ（笑）
村野　（田辺に）［え、ルナールは？
田辺　もう、すぐいらっしゃると思います。（兵藤と葉一郎を紹介しようと）ああ、こちらは
　あの、
兵藤　あ、どうも。

葉一郎　こんにちは。
八田　こんにちは。
田辺　こちらはあの、なんか、関係者の方です。
八田　「なんか関係者の方」？
枢木　（笑）なんの関係者よ？
田辺　わかんないですよ、さっき、道端で会って。
枢木　あ、そうなの？
田辺　［はい。
兵藤　［ああ、いや、ちょっと人を探している感じでして、
八田　人を？
田辺　（村野に）それをまた、ルナールさんが拾って。
村野　ああ、
八田　いつもの布教活動だ！　ねえ？
田辺　はい。そんな感じで。
村野　また面倒なことを――。
八田　★（村野に）そんな顔しないの！　ね？　少しづつでも理解者を増やしていかないと。
村野　今更そんなことといってもねえ。
田辺　そうですよ。昨日も大変だったんですから、こっちは。
村野　［ホントだよ。
枢木　［ああ、昨日って、公聴会？
田辺　はい。
枢木　そっかそっか。ご苦労さまでした。
八田　え、え、それでどうだったの？　公聴会でのその、――結果は？
田辺　もう、こってりしぼられちゃった感じで。
村野　いじめだ・いじめ。
八田　ああ、そう？　じゃあ、もう決まり？　決まっちゃった感じ？
田辺　ええ、まあ、潰す気まんまん、ていう感じでしたんで。
八田　ええー。そっかー。
村野　向こうはホッキョ区の存在意義なんかハナから認める気ねえんだからさ。こっちの話も「聞いてやってる」ってだけ。
八田　そっかー、ダメだったかー。

◎　医院にて　その２　ルナール、合流

ルナール、倉橋、登場。

ルナール　おいー。
枢木　お、来た来た。

八田　どうぞどうぞ、いらっしゃい。お待ちしてましたよ。
倉橋　ああ、どうも。
八田　どうぞどうぞ、おかけになって。
倉橋　ああ、すみません。
枢木　遠くからいらしたんですか？
倉橋　まあ、そうですかね。ボチボチ。

☆蜂ヶ谷　みかん食べます？
兵藤　いや、え？　食べないです。
蜂ヶ谷　いいから食べなさいよ。
枢木　おいしいですよ。
兵藤　いや、朝、食べてきましたんで。
葉一郎　じゃあ、僕はひとつ、いただかこうかな。
兵藤　（倉橋に）遅かったじゃん。なにしてたの？
倉橋　ああ、ちょっとコケちゃってなんか。
兵藤　ホントに？
葉一郎　大丈夫でした？
倉橋　やあ、平気・平気。

☆ルナール　ちょっと田辺さん、お茶淹れてきてくれない？　人数分。
田辺　ああ、はい。わかりました。
村野　俺も手伝おうか？
▲田辺　あ、結構ですー。
村野　なあんだよ。

田辺、退場。

ルナール　村野さん、村野さん、――村野さん。
村野　聞こえてます。なんですか？
ルナール　今日はみなさんにも、一緒にサロンに参加してもらおうと思って。
村野　ええ、伺ってます。
倉橋　サロン？
ルナール　はい。今日は、いろいろ集まって、みんなでお話をしますんで。
八田　そう、聞きたいことがあったらじゃんじゃん聞いちゃってください。
兵藤　はあ、まあ。
ルナール　今日は蜂ヶ谷さんもいますしね。もうじきでしたよね？
蜂ヶ谷　うん。もうじき・もうじき。
兵藤　ああ――、もうじきっていうのはそれは？

ルナール　ですから、そりゃ、
蜂ヶ谷　★オサラバかましてやるんだよ。
枢木　［蜂ヶ谷さん！
ルナール　［ハハハ。そう。おさらばかましてやるわけです。
兵藤　ああ。そうですか。
枢木　そんなことばっかり言って。
八田　すみませんね、育ちが悪いもんで。
蜂ヶ谷　八田さんだって一緒でしょ。
八田　そうそう、由緒正しきホッキョ区民です。（調子を変えて）わたしく、生まれも育ちもホッキョ区中筋。稲荷神社の産湯を使い、姓は八田、名は兼続、人呼んで、ホッキョ区最後のリリーフエース、カネチーと発します！
ルナール　よーッ！
枢木　バーカ。
倉橋　みなさんはその、患者さんとお医者さんというか？
枢木　いやいや、それだけじゃないんです。この人と私は観光協会のもので。
八田　［そうそう。
葉一郎　［観光協会？
倉橋　［へー。――なんでこんなとこに、そんな方が？
八田　そうですねー。（パンフレットを取りに行き）まあ、話せば長くなるんですが、
枢木　何年か前に、この町が安楽死特区に指定されたんですけどね、そのことがまあ、観光としての強味になるんじゃないかっていうことで。
倉橋　安楽死特区。
八田　そう！　（パンフを配りながら）さびれたホッキョ区でなんとか夢をもう一度、っていうんでワタクシ、立ち上がりまして。
倉橋　［はあ。
兵藤　［じゃあ、安楽死を観光産業にしようっていう？
八田　［［はい。
枢木　［［っていっちゃうとなんか、人聞き悪いですけど、
倉橋　たくましいですね。
八田　でしょう？　たくましいんです、この町は。
蜂ヶ谷　往生際が悪いだけ。
八田　いや、人生と町とは別ですよ？　私だって個人として最期を迎える時には、ね。潔くオサラバかましてやりますよ。
田辺　へー？　潔く？
蜂ヶ谷　絶対ない。これは最後まで粘るタイプだよ。
田辺　［ですよねー。
枢木　［やー、わかんないよ？　案外、こういう人が最後はしょぼーんと落ち込んじゃうんじゃない？

村野　そっちだと思うなァ。
八田　ええ？　落ち込みませんよそんな。
村野　どうかなー。そもそも八田さんね、目が笑ってないんだよ。
枢木　わかる。
八田　★なんてこと言うんだ！
村野　（田辺に）若作りにも無理があるし。
田辺　［ですよね。
八田　［放っといてください！　私がオサラバする頃にはホッキョ区もまた、今よりずーっと
　にぎやかな町になってますからね。
枢木　それでなに？　あなたは町の再生の立役者として――。
八田　そう、町を上げての生前葬！　人もキツネも言葉を失う、感涙必至の大セレモニーです
　よ！　あ、そん時はみなさんも来てくださいよー？　もっとも、そん時はもう全員、オサラバ
　しちゃったあとかもしれないですけどね。なんつって！
葉一郎　ああ、いや。
兵藤　ハハ。
枢木　（八田に）ちょっと！　困っちゃってるでしょ。
八田　あれ、そう？　困っちゃいました？
葉一郎　いやいやそんなことは、
兵藤　や、思っているよりみなさん、明るいんで。

一拍。

蜂ヶ谷　どうにもなんねえしな。辛気臭い顔してたって。
村野　でも少数派ですよ、こういう、蜂ヶ谷さんみたいな方は。
枢木　［そうそう。
葉一郎　［ああ、そうですか？
村野　もっと全然、誰ともしゃべらない人の方が多いです。
蜂ヶ谷　今更友達づきあいでもねえだろ、って連中が多すぎんだよ。最後だからこそ伝えられ
　ることがあんじゃねえのか、って。
ルナール　まあ、ホッキョ区の住人とはいったって、意見はそれぞれですから。
村野　そう。俺もルナールとは立場が違うしねー。
兵藤　立場？
ルナール　医者もいろいろでしてね。ポリシーに沿わない施術は拒否する連中も多いんです。
倉橋　へー。
ルナール　ちなみに私は、いちばん幅広くやってるタイプですが。
枢木　そう。心因性の積極的安楽死まで引き受けちゃって。
葉一郎　シンインセイの積極的――？
枢木　あー。ていうのはですね、その、

葉一郎　安楽死にもいろいろ種類があるんですか？
枢木　そうなんです。
ルナール　特区とはいっても厳格なルールがありましてね、
葉一郎　へー？
村野　単なる自殺や殺人とは、区別しなきゃいけませんから。
倉橋　そうか。ああ、そうですよね。
葉一郎　でも、どこで区別されるんですか？　安楽死とその、――単なる自殺や殺人と？
ルナール　んー。そうですねえ、それは。（これは長い説明になりそうだな）
蜂ヶ谷　――どうなの、田辺さん？
田辺　あたし？　なんであたし？
蜂ヶ谷　やあ、せっかくの機会なんだから。
八田　ホッキョ区の住人たるもの、特区外の方にもわかりやすく説明できないと。
田辺　えー？　だからまあ――＝
枢木　（兵藤に）新人なんですよ、田辺さん。
兵藤　ああ。
田辺　簡単に、まあ、簡単にざっくりいいますとね、
葉一郎　はい。お願いします。
田辺　えーと、まず、――ホッキョ区で扱っている安楽死にはどういうものがあるか、っていうところから入りますとね、
葉一郎　はい。
蜂ヶ谷　フフフ。
田辺　もちろん、ホッキョ区でも安楽死を行うためにはそれなりの条件があるわけです。誰でも彼でも、どんな場合でも受け付けるなんてことは無いわけで、
葉一郎　はい。それなりの、条件？
田辺　（以下、指を折って数えながら）まず、回復の見込みがないこと。
八田　治りません、と。
田辺　あと、――耐え難い苦痛が続いていること、
八田　痛い・痛い・痛い。
田辺　それと、――本人に明確な意思表示ができること、
八田　もうムリ―っ！
田辺　あとは――、えーと、
村野　複数の医師の診断書があること、
田辺　★あ、そうです！　複数の医師の診断書があること。
八田　みんなそういってるよー、と。
ルナール　まあ、こんな感じの条件をクリアして、ようやく準備が整った、と。
枢木　（八田に）うるさいよ。
兵藤　複雑なんですね。いろいろ。

ルナール　いや、複雑なのはむしろここからです。そもそも一口に安楽死といいましても、大きく二種類に分けられるわけなんですが、
兵藤　二種類？
ルナール　ええ。自殺と他殺と、つまり、介助自殺と、積極的安楽死ですね。
倉橋　自殺か、他殺か、
兵藤　なんか、物騒な言い方ですね。
ルナール　では、田辺さん。安楽死と、単なる自殺と、単なる殺人と、どう違うんでしょう？いかがでしょうか？

一拍。

田辺　えーと、これはちょっと、落ち着いて聞いてくださいね、ちょっとあの、過激な言い方にはなってしまうんですけどね、
兵藤　ええ、
倉橋　おっしゃってください。
田辺　――安楽死と自殺、あるいは殺人とを完全に、すっぱり別物だといって分けることはあの、――できません。
倉橋　「できません」？
田辺　違いますよ！　もちろん、安楽死というのは法律上、自殺とか、殺人とは全く別ものです。でも、とっても広い意味で言えばですね、介助自殺というのはやっぱり自殺の一種とは言えてしまうでしょうし、本人に頼まれてその方の人生を止めることは、いわば、嘱託殺人、同意殺人の一種である、と、言わざるを得ないとは思うんです。
倉橋　殺人、いや、殺人と区別が無いんですか、えっとそれは、
田辺　いや、区別はありますよ、もちろん！　本人の意思に反して命を奪う殺人と、本人にお願いをされて行う安楽死と、全然、違ったことです。
兵藤　本人の意思――。
田辺　そうです。本人の意思がものすごく重要になって来るんです。そこが、単なる殺人との明確な一線、――ですかね、
兵藤　なるほど。
ルナール　とはいえ、――本人の意思、なんてどこまでいっても曖昧なものですけどね。たとえば認知症を患ってしまった場合には、以前にした安楽死への意思表示はどうなってしまうのか、なんて考えだしたら、――ねえ？
倉橋　んー。難しいですね。
葉一郎　あの、

一拍。

葉一郎　精神的なことを理由にした安楽死、っていうのは、どうなるんですかね？

村野　精神的な。
葉一郎　はい。や、これは別に興味本位ってわけじゃなくて、うちのその、――妹が、ああ、そう、（兵藤を示して）彼の奥さんも僕の妹なんですけどね、その下にもうひとり居まして、純、純ていうんですけど、その、純は別に、体は元気なんですよ。だけど、まあ、若い頃から精神的な問題を抱えておりまして、
ルナール　はい・はい。
葉一郎　自分の感覚としては、まあ、肉体的な限界というか、末期の方がそういうことを強く望まれるのだったら、んー、そういう方法があってもいいのかな、とは思うんですよ。でも、でもですよ、――あくまで精神的な理由で安楽死を希望するっていう場合には、それは、うーん。正直それはどうなんだろうな、と思っちゃってまして、
ルナール　（喜んで）おお！　それについてじっくり話しましょうか。
葉一郎　［はい。
田辺　（村野に）［こないだの、あの妹さんの方ですよね？
村野　うん。だろうね。
葉一郎　え、え？　妹にお会いになったんですか？
村野　多分、それらしい方が、（田辺に）なんておっしゃったっけ？
田辺　ええと、平山純さんと、
葉一郎　おお。
田辺　兵藤里砂さん。
兵藤　おおおお、リサ？　リサに会ったんですか？　会ったんですね？　というか、え、今はどこにいるんですか？　ここですか？　この建物のどこかにリサぴょんが？　［どこですか、どこですか？　おーい！　リサぴょーん！

兵藤、立って里砂を探す。

枢木　［いやいやいや、
村野　［言ってない・言ってない。
田辺　――だからあんまり興奮しないでくださいって。
ルナール　大丈夫ですよ。すぐに会わせてあげますから。
兵藤　ホントですか？　ええ、ホントなんですか？
ルナール　本当ですから、落ち着いてください。
倉橋　すみません／（兵藤に）静かにして。
兵藤　だって、だって、だってだよ。
倉橋　［わかる・わかるけどさ。
葉一郎　［今はいったん、な？　お話をしよう。
八田　いいじゃないですか、元気があって。
枢木　今のその、精神的な理由での安楽死は認められるのか、っていう話題は結構、ね？　意見の分かれたとこなんですよ。

村野　そうねえ。
八田　特区を作る時に一番揉めたところです。
村野　まあ、かなり危険な問題を孕んでいますから。
葉一郎　危険な問題？
村野　［ええ。
ルナール　［という立場の人と、まあ、あたしみたく、あくまで御本人の希望に最大限お応えしようとする立場の人間とで意見が割れてまして。
村野　相容れないんですよ。
葉一郎　素人考えなのかもしれないんですけど――、ね――。
八田　どうぞ・どうぞ。
葉一郎　精神的な理由での安楽死を認めてしまったら、なんというか、――ただ単に「自殺したい」っていう人にその、――手段を提供することになっちゃいませんか？
村野　だから危険なんです。そんなことは許されるべきじゃありません。
葉一郎　ですよね？　え・じゃあ、そういう人がここに来ても、ちゃんと断るっていうか――
村野　ええ、少なくとも私は引き受けません。
葉一郎　やっぱり！　じゃあ、止めてもらえるんですね？＝
ルナール　＝ですので、そういった方はあたしが引き受けます。

葉一郎、ルナールを見て絶句する。

ルナール　――村野さんのそういうとこは現実逃避だと思うなあ。
村野　現実的な切り分けだよ。俺はそっちには手を出さない。
八田　（取りなすように）制度としては一応、ね――そういうケースが認められる場合もあるんですが。
葉一郎　でも、危険な問題だって、今、（村野さんが）おっしゃってたじゃないですか？
ルナール　ですから、厳しい審査をしていますよ。
葉一郎　いや、厳しい審査をしたとしてもですね、
ルナール　★たしかに、精神的な問題は気の持ちようでなんとかなるって言う人もいます。そういう場合もあるでしょう。だけど、そうじゃない人もいる。病気の場合だってあるんです。
葉一郎　そんなの、区別が曖昧じゃないですか？　なんとかなるかどうか、それは、やってみなきゃわからないでしょう？
ルナール　わかりませんよ。ただ、精神的な問題から、何度も何度も自殺未遂を繰り返す方もいるんです。――何年も。何十年にも渡ってね。

一拍。

ルナール　精神的な理由では絶対に安楽死を認めない、――そう決めてしまったら、あまりに救いがないじゃないですか？　絶対にうまく生きられないと感じている方に対しても、絶対に安楽死を許さない。――それでその方はどうなります？

葉一郎　ど、どうってだから、

ルナール　安楽死を禁止するとそういった方みんなが希望に満ちた人生を取り戻せるんですか？　――いいえ、不可能です。では、前を向けなかった方、いや、前なんか向きたくもない方はどうなります？　――社会にも、医療にも深く絶望して、たったひとりで自殺していくんですよ。

葉一郎　そ、そうとは限らないじゃないですか、［だからそういった結果にならないように、

ルナール　［ええ、ええ、ええ。そうとは限りません。私は何も、精神的に苦しんでいる人みんながやがて深い絶望に陥ってしまう、だなんて、そんな極端なことは申しません。ただ、――やがて誰もが前向きになれる、なんていう極端なことも言わないでいただきたい、と言っているだけなんです。

葉一郎　でも、――でも、いろいろあるじゃないですか方法は！　いや、それでも絶対、諦めちゃダメなんですよ。だって、諦めてしまったらそれは、諦めてしまったらだって、

蜂ヶ谷　諦めたらそこで、試合終了ですよ？　［フォー！

八田　［フォー！

枢木　ちょっと、なにいってんですか。

蜂ヶ谷　いや、あんな振られたらだって、

枢木　振りじゃないでしょ、今のは／（葉一郎に）ごめんなさいね。

葉一郎　いえいえ。

興奮する葉一郎を倉橋・兵藤が制止する。

ルナール　まあ、とにかく、――世界には精神的な理由による安楽死を認めている地域もあるんです。現にその制度によって救われている人もいる。実際に安楽死をしない人も含めてね。

倉橋　ん？　安楽死をしない人も含めて、――その制度に救われるんですか？

ルナール　だって希望が持てるじゃないですか？　イザという時にはそういう方法があるって思うだけで、だったら生きてみようかな、と、そう思える人もいるんです。

倉橋　――そういうものですか？

ルナール　みたいですよ＝

村野　＝ま、危険は残りますけどね。まだまだ生きられるかもしれない人の命を奪ってしまう危険は残ります。

ルナール　そうですね。生き地獄のような人生を歩み続ける危険も残りますし。とまあ、ここに関しては医者の間でも合意に至らないわけでして。

◎　医院にて　その３　ホッキョ区の終末期

増田、登場。

増田　すみません、遅くなりまして。
八田　ああ、増田さん。
枢木　遅かったじゃん、ホントに。
増田　ごめんごめん。頑固だからさ、もう、向こうが。話にならなくて。
枢木　どうだったの、それで？
増田　ええ？　ダメダメ。取り付くシマもない。
枢木　ああ、そう？
八田　それじゃ、やっぱり？
増田　ま、決定が覆ることはないかな。
八田　くー。そうかあーっ！
枢木　残念。
ルナール　いやいや、これだけの期間、持ちこたえたんです。画期的なことじゃないですか？
増田　でも、一定の需要があるわけだからね。
八田　そうですよ！　ここを無くしてしまったら、行き場のない方々がまた沢山出て来るわけでしょう？　それを思うと私はもう、やりきれんですよ。
蜂ヶ谷　またまたー。
村野　素直にお客さんが減って哀しいと言えばいいのに。
蜂ヶ谷　［ねえ。
八田　［いや！　まあ、それも無いとはいいませんけどね、でも、私はこう、十年がかりで盛り上がってきたプロジェクトを簡単に潰してしまっていいのか、って、
ルナール　★うん・うん・うん。八田さんは立ち上げの時からいらっしゃいますもんね。
八田　そうだよ。というか、正確に言えばそのもっと前、親父が誘致活動してたころから関わってるからね、俺は。
増田　へえ、そうだったんだ。

☆枢木　あれ、知らなかった？
増田　だって、特区になったあとで来たから。あたし。
枢木　そっかそっか。

☆蜂ヶ谷　え、じゃあ、十年じゃきかないってこと？
八田　だから誘致まで含めたら、十二・三年？　親子二代、十五年がかりですよ。
蜂ヶ谷　ああ、そりゃあ、なんとも。
村野　ご愁傷様。
倉橋　え、あの、なんかあったんですか？
ルナール　や、まあ、近々ホッキョ区のこの特区制度もなくなるっていうことでね。
倉橋　ああ、そうなんですか？

葉一郎　どうしてまた？
ルナール　んー、――どうしてなんでしょうね、村野さん？
村野　え、俺に聞かないでよ。
増田　それは潰そうとしているやつらに聞かないと。

間。

増田　だいたいさあ、いい歳して子供すぎるんじゃないの？　と思うわけ。
ルナール　［ほうほう。
蜂ヶ谷　［お？　お怒りだよ。
増田　誰だっていつかは死ぬわけでしょう？　そりゃ今すぐ、とは思ってないでしょうけど、長い目で見たら誰だって、ねえ？
蜂ヶ谷　そうだ・そうだ！
増田　だったら、自分がどんな形で最期を迎えたいのか考えておけばいいのにさ。貧しいんだよ、イメージが！　別に職場で亡くなったっていいし、過労死で亡くなって大満足、って人がいたっていいわけじゃない？
ルナール　そりゃあそうです＝
枢木　＝ええー？　それは――。
増田　だから孤独死がベスト、って思っている人がいたって別にいいわけよ。なのに孤独死っていうとすぐ、不幸な最期、みたいな話になっちゃって――
枢木　まあ、そういう部分はあるけどさ、
増田　弱りきった姿なんか誰にも見せたくない、って人も大勢いる。だったら、孤独死は全然残念な最期じゃない／でしょ？
八田　いやあ、ホントそうですよ。
枢木　でも、極端だよそれは。
村野　★いや、――むしろ理想だよね、孤独死。
田辺　ウソでしょ、村野さん？
村野　なんで？　ホントホント。
増田　［ね？
田辺　［そんなこと言わないでくださいよ。
増田　こういう人もいるの。ひとりで逝かせてやる優しさもあるでしょ、って。
兵藤　それって、優しさですかね？

一拍。

増田　そりゃそうでしょ。
兵藤　だってなんか、――寂しくないですか、それ？
増田　というか、誰？

兵藤　あー、いや、
増田　ごめんなさい。あれ？
兵藤　すみませんなんか、横から急に、

☆枢木　（増田に）ああ、なんか今日のゲストっていうことでさ。
村野　（増田に）人探しだって。
増田　ああ、引き止めにきた感じ？
村野　そうそう。多分そんな感じ。
枢木　今、一緒にお話しましょうってなって。
増田　はいはいはい。

☆ルナール　いいんですよ全然、横から口を出したっていい、そういう土地柄ですから。
八田　そうです。そういうサロン文化を築いてくってのも、ホッキョ区のコンセプトですから。
兵藤　やあ、なんか聞いてたら他人事じゃない感じになっちゃって、
倉橋　［うんうん、わかったわかった。
葉一郎　［いいんだよ、いいんだよ。俺だってそうだ。
枢木　（兵藤に）でもあの、私もわかりますよ。
兵藤　はい。

兵藤、田辺に近づいて。

枢木　孤独死させちゃうのはヤだな、っていうのはわかります。最後ぐらいはだって、ねえ。
兵藤　はい。一緒にいてあげたいっていうか＝
枢木　ええ、ええ。
兵藤　＝そういう気持ちだってあるじゃないですか？
増田　まあ、本人が望んでるならいいと思うけど、
兵藤　★いや、望んでいなくても、ですよ＝
増田　なんでよ（笑）
兵藤　＝だってそんな、遠慮する人だっているし＝
増田　ええ？
兵藤　＝助けてほしい時に、助けて！　って言えない人だって沢山いるじゃないですか？　いますよ、そういう人だって！
ルナール　おお、――いい意見だ。
八田　その通りですよ。
蜂ヶ谷　全部賛成してんじゃん、今日。
八田　今日じゃないです。いつもです。
蜂ヶ谷　だよね。八田さんそういう人間だった。

増田　（兵藤に）でもさあ、――最後までカッコつけたいと思っている方もいるわけよ。それはわかるでしょ？
兵藤　はい。それは――
増田　じゃ、例えばそういう方のオムツを半年も一年も取り替えてあげて？　それでプライドがズタズタになっちゃったら、それって、いい最期とは言えないんじゃない？
兵藤　や、そうかもしれないですけど。でも、――それでも、最後まで生きたいって気持ちがあるはずですよ、誰だって。
増田　誰だって――。
兵藤　そりゃ、満足な状態では無いのかもしれないですけど、それでも、
蜂ヶ谷　キリが無いんだよ。そんなこと言ってたら。

一拍。

兵藤　確かに、キリが無いのかもしれないですけど、
増田　そういうのってさ、あなたのエゴを押し付けてるだけ、ってことにはならないの？
兵藤　や、そんなこと言ったら何もできないじゃないですか。
増田　――そう？
兵藤　★そうですよ。どんな親切にだって愛情にだってエゴは混ざってくるもんじゃないですか？
増田　うん。だよね？　だからこそ、――本人が大切にしてるものを大切にしてあげたらいいんじゃない？　生きたいって気持ちが大切ならそれでもいいと思うし、でも、みんながみんなそう思ってるわけじゃない／でしょ？　自分が大切にしているものを押し付けたってしょうがないんだから、
田辺　増田さん。
八田　あんまり飛ばし過ぎちゃうと、
増田　はい、出た。こういうことを言うとすぐ怒る人がいるわけでしょ？　「弱者は孤独に死んでいけというのか」みたいな？　言ってないっつーの。
枢木　いや、そうじゃないけどさ、

一拍。

倉橋　でも、残された人はどうなるんでしょう？
ルナール　どう、っていいますと？
倉橋　せめてその、最期の瞬間までついていてあげたい、っていう、家族とか、友人とか、そういう人の気持ちはどうなるんですか？　確かに、エゴなのかもしれないですけど、でも、――安楽死も、孤独死も、そりゃ本人が望むならいいのかもしれない、って思いますけど、でも、看取る側――っていうんですかね？　そういう人たちの中にも後悔が残るじゃないです

か？　もっとできたんじゃないか、なんで何もしてやれなかったんだろう、って。最後までカッコつけたい、なんて、そんなの、死ぬ側のエゴなんじゃないですか。

一拍。

ルナール　どうなんでしょうね？
増田　いいと思うけどね、看取る側の気持ちもある種、尊いな、とは思うよ。
倉橋　★だったら、そういう人の思いだって、エゴって決めつけなくていいじゃないですか？
増田　いやいや、決めつけてはないでしょ、
倉橋　そうですか？
増田　そうじゃん・いや、うーん、違うか。

一拍。

増田　あ、まずはエゴって決めつけてるみたいに聞こえたなら、ごめんなさい。そういう、うん。決めつけるような言い方になってたね。――すみません。
倉橋　★［いえいえ。
兵藤　［いやいやいや。
増田　ちょっと落ち着こう（笑）
枢木　そうしよう（笑）

一拍。

増田　あたしが言いたいのはそんな難しいことじゃなくてね、最期を迎えるとき、一番大切なのは本人の思いでしょ、って。そんだけのことで。
倉橋　それは、私も思います。
増田　ね。
村野　ちょっときつい言い方に聞こえちゃったかもしれないけどさ＝
倉橋　いえいえ・
村野　＝彼女のお父様は結構がんばって延命治療しちゃったからさ、って事情もあるわけよ。
倉橋　［ああ
増田　［いいですよ、そういうのは。
村野　ここで働いてる人にはそういう人が多いの。親御さんの看取りになにか後悔があったり、いろいろと思うところがあってターミナルに来るっていうさ、俺も含めてね。

間。

増田　ホラ、そんなこと言ったら何も言えなくなっちゃうじゃないですか？

村野　大事なことでしょ。「何を言ってるのか」と「誰が言ってるのか」、両方大事なこと。
増田　あたし、情に訴える気はないですから。

一拍。

ルナール　まあ、立場が逆になったら意見が変わる人も居ますしね。「最後の最後まで面倒を看てあげたい」って言ってた人が、イザ自分の番になったら「誰にも迷惑はかけたくない」っていうこともある。
倉橋　［ああ。
蜂ヶ谷　［ホントそれ。
枢木　増田さんは、ね？　ここんとこそういう、デモの参加者と話すことが多かったから、
葉一郎　へえ。デ、デモなんかあるんですか？
八田　あります・あります。
枢木　観光協会はデモに潰されかけてますから。
兵藤　ああ、それもさっきいってた――？
枢木　ええ。そういう、反対派というのは最初からいたんですけど、いよいよそういう声に対抗できなくなっちゃったみたいで。
兵藤　［ああ――。
八田　この町の終末期ってトコですかね（笑）――や・まだまだ諦めませんけどね、私は！
蜂ヶ谷　ホラ。往生際が悪い。

何人か笑う。

葉一郎　そんなに反対があるもんなんですね。
枢木　そりゃありますよ。すごいもんです。
葉一郎　それはあの、――どういう反対なんですか？
枢木　ええ？　どういう、ってだから――。
村野　人殺しィとか、姥捨て山ァとか、
八田　「ダークツーリズム」なんて言われたりもしましたね、
ルナール　サイコパス、シリアルキラー、殺人狂、
田辺　や・ルナールさんはまたちょっと別ですけどね、
ルナール　あー、「処刑場は要らない！」なんて横断幕もありました。
葉一郎　処刑場――。
増田　うちらは選択肢を提供しているだけなのにね。
田辺　むしろ満足して亡くなっていく方ばかりなんですけどね。
増田　それをさ、「処刑場」はあんまりじゃんね（笑）
田辺　はい。
葉一郎　それは、――お辛い立場ですね。

◎　医院にて　その４　お辛い立場

増田　そりゃ私だってさー、ホッキョ区が完璧だとは言わないよ？　でも、ここがなかったらどうなるの？　ただ苦しみを終わりにしたいって言ってるだけなのに、それでも生かされちゃう人のさ、そっちの側の人権はどうなっちゃうの？　って思うわけ。

葉一郎　そうか。そういうこともあるんですもんね。

村野　でも、――死ぬ権利なんて人権かな？

葉一郎　ええ？

増田　なんですか、急に？

村野　や、それはなんか、違うと思うんだ。俺は。

増田　――どうしてですか？

村野　だって人権って、生きていくための権利でしょ？　誰かを殺す権利なんて誰にもないよ。たとえそれが、自分自身に対してであってもね。

兵藤　ですよね？　僕も、はい。そう思います。

増田　（笑って）いやいや、ちょっとちょっと――。

一拍。

増田　え・そんなこといったら安楽死どころか尊厳死だって出来なくなっちゃいません？

村野　できるでしょ別に。

増田　んー、そうですか？

村野　だって尊厳死ってのは治療行為の中止って意味でしょう？　ここではさ＝

増田　＝はい。

村野　まあ、言ってみれば自然死だよ。単に治療を止めるってだけで、あとは本人の「死ぬ力」に任せるわけだから。誰かが死を引き起こすような行為をするわけじゃない。

増田　え、じゃあ、――どういうことですか？　村野さんは安楽死なんか諦めて、せめて尊厳死ができるようになればそれでいいって、そこまで妥協しようっておっしゃるんですか？

村野　――まあ、そんなことを俺が望んでるわけじゃないけどさ。

増田　それじゃ、反対派の人たちが言ってることを受け入れるんですか？　「処刑場は無くします」ってそんなとこまで妥協するんですか？

村野　「もう、死にたいやつは自分で勝手に死んじゃってくれよー」

一拍。

村野　なんてさ。そんな気分にもなるよ。

増田　ヤケにならないでください。

村野　だけどさ、――個人が抱える自殺願望みたいなものまで含めて医療とか、法律とかの枠組みの中に収めるっていうのはさ、んー、それはなんか、限界があるよ。

増田　でしょうね。でも、ギリギリのとこまでは粘りましょうよ。

村野　そりゃ俺だってそうしたいよ。だけど、――死ぬ権利を認めたくない、と言ってるのは俺じゃない。病院の外の連中だよ。ホッキョ区の外の連中だよ。あいつらはみんな、死ぬ権利なんてものが存在している社会を認めたくないんだよ。だって、そんなことを言う人間は怖いからね。そう！　怖くて怖くて仕方がないんじゃないか？

増田　だからって、――「死にたいやつは自分で勝手に死ねばいい」？

村野　いや、それはちょっと言い過ぎたかもしれないけど＝

増田　ですよね？

村野　＝なんでも合法的に、社会的に、っていうのは無理があるんじゃないか、ってことをいってるの。

間。

増田　村野さんは安楽死を希望してる人たちを単に自分で、――自殺をすることができない人たちだとでも思っているんですか？

村野　んん？　そりゃまあ、――そういう部分はあるんじゃないの？　［語弊はあるのかもしれないけど、

増田　［いやいやいや、そういうことじゃありませんから！　自殺は潔くて、立派で、サムライ的で？　それで何ですか、安楽死はいくじなしで、甘ったれで、弱々しい、――とか？　全然、そういうことじゃありませんからね？　自殺は個人的なもの。安楽死は社会的なものなんですよ。

村野　――どんな人間だって死ぬ時はひとりだろう。

増田　へー、そうですか？　じゃあ、個人的じゃない、社会的な死に方なんて存在しないんですか？

村野　安楽死だって究極的には個人的なものじゃないか、

増田　そういう側面もあります。でも、安楽死は、どうやって死を受け入れるか、っていう、社会の側の、生き残る側の問題でもあるんじゃないですか？　だから私は、ある意味で、安楽死をする人たちは自分の「死」を社会に託してくれている、って、そう思うんです。

村野　託してくれている？

増田　ええ。最も個人的なことを、究極のひとりきりで引き受けなきゃいけない「死」っていう出来事を、勇気を持って社会に開いて、他人を、最後の最後まで誰かを信じることによって、託そうとしてくれているんじゃないですか？　だから私は――、

一拍。

増田　死ぬことはあなたの権利だよっていって、そういう人たちにちゃんと応えてあげたいんですよ。それを、私たちが引き受けないでどうするんですか？　生き残る側が、社会の側が逃げてどうするんですか？

村野　んー、逃げているのは俺たちか？　――違う。まさしくその社会ってやつが、病院に対して、医師に対して、そんな権限は与えないよ、と言ってるんじゃないか。――忘れちゃダメなんだよ。そもそも、病院てのはなんのための場所なのか？　俺たちは何を期待されているのか？　死にたい人を死なせてやることなんかじゃない。生きたい人の手助けをするのが病院でしょう？　［命を救うための――

増田　［なん・なんで村野さんまで生きていることが絶対の正義みたいに言って、ええ？　ここまで来て「命は尊い」ですか？　じゃあ、なんでターミナルなんかやってるんですか、っていう話に［［なりますよ、そんな。

村野　［［ならない、ならないよ。俺はただ、――原則を忘れちゃいけない、って言ってるんだ。望んでもいないのに生かされ続けてしまうような事例が沢山、沢山あったとしても、それでも、望んでいないのに殺されてしまうような人を出すべきじゃ無いんだよ。

増田　★だからなんで「殺される」って話に飛躍するんですか？　というか、――村野さんだってわかってるでしょう？　望んでいないのに殺される？　現実はその逆じゃないですか。たくさんの人がボロボロの状態で生かされて、殺してくれ、って頼んでも、辛いですよね、しんどいですよね、でも一緒に頑張りましょうね、って、そう返されちゃうようなそういう現実が、そういう絶望が、まだまだそこら中に転がってるじゃないですか？

村野　それは、――そうだね。

増田　もう自分の力では食べられない、しゃべれない、ただ、ただ、病院のベッドにずらーっと並べられて、一点をずーっと見つめてるみたいな人たちに、それでも生き続けろって言うんですか？　あなたには死ぬ権利なんかありませんからっていって！　――いつまで？　あたしにはもう、言えません。

村野　――俺にも言えないよ。だからここにいるんじゃないか、俺だって。

一拍。

増田　まあ、そりゃあ、そうですよね。

村野　うん。

ふたり、笑う。

八田　もう・もう・もう！　今日はこの辺にしときましょう！　ね？

枢木　熱くなりすぎだからふたりとも。

蜂ヶ谷　聞いてるこっちがヘトヘトだよ。

増田　そう？　日常茶飯事だけどこんなの／ですよね？

村野　間違いない。

田辺　ヤな日常――。
枢木　やあ、でもでも、少なくとも、こういう話ができるってだけでも、ホッキョ区が存在した意味はあったんじゃないですか？
ルナール　かもね。こんな話・他所じゃ出来ませんから。
八田　その通りですよ。意義深い。
蜂ヶ谷　ねえ、あんたらは、――明後日、十六日はなんか予定あるの？
倉橋　や、まあ、予定っていうか――
兵藤　できれば早いとこ妻と会って、――とは思ってますけど。
蜂ヶ谷　良かったら、パーティに来ない？
枢木　ああ、それいいですね。
蜂ヶ谷　でしょ？
枢木　絶対。来たらいいですよ。
兵藤　いや、ちょっと、そんな気分じゃないですよ。
葉一郎　そうすね。せっかくですけど。
八田　いやいや、違いますよ？　ただのパーティじゃありませんから。
蜂ヶ谷　そう、生前葬というかね、そういうパーティでして。
八田　厳かで、重厚で、それでいて明るくて、すばらしいセレモニーになりますよ、きっと。
蜂ヶ谷　八田さんが言うと台無しだけどね。
八田　★なんでよ！
倉橋　（ルナールに）え、それは、どういったイベントなんですか？
ルナール　まあ、ただの会食ですよ。ちょっとしたインタヴュー付きの。
倉橋　インタヴュー？
ルナール　今から死ぬってどんな気持ちー？　っていうのをね。みんなで聞いてみて。
蜂ヶ谷　明後日はさ、俺の生前葬なんだ。
葉一郎　ああ、そう、でしたか。あなたの――。
蜂ヶ谷　うん。せっかくのご縁だし。人もたくさん来るから。
ルナール　――どうです？　いらっしゃいますよね？

場面転換。

◎　医院にて　その５　観光の落陽

八田、枢木が残っている。八田はじっと座っている。枢木は片付けをしている。
枢木、片付けに一段落つけて、
枢木　帰りましょう。
八田　んん？　うん。

一拍。

枢木　（八田の傍に座って）あなた。

八田　ああ、帰る帰る。

枢木　そんな、――町が潰されるわけじゃないんだから。

八田　また、一からやり直しだ。

枢木　――いいじゃないですか？　やり直せば。

一拍。

八田　元気だな。君は。

枢木　落ち込んでますよ。あたしだって。――けど、それはそれ。

八田　うん。

枢木　大丈夫よ。人間の居ない頃から、ちゃァんとここで暮らして来たんですから。

一拍

八田　フフ。私はそういかないよ。

枢木　何いってんの。家族じゃない。

八田　――そうだけど。君はいいとして私は、

枢木　★もうずっと前から仲間でしょ。

間。

八田　じゃあ、うん。帰ろうか？

枢木　そういってんでしょ。

ふたり、退場し始める。

▲八田　たくましい嫁さんをもらったよ。

▲枢木　んん？　なんて？

▲八田　殺しても死なねえような奥さんをもらったなー、って。

▲枢木　どういうこと？　ねー。

八田、退場。追いかけるように、枢木、退場。

【三場】　ホッキョ区のホテルにて

◎　倉橋／兵藤

その日の夜。
ホッキョ区のホテル。外の風景が見える廊下にて。
兵藤、登場。リュックの中身を確認し、そのあと、その風景を眺めている。
倉橋、登場。兵藤に気付かれないように背後から近づき、声を掛ける。

倉橋　なーにやってんだよ。
兵藤　★おお、びっくりした。
倉橋　――寒くないの？
兵藤　ああ、いや。ね。寒い寒い。

間。

倉橋　なに？　（遠くを眺めて）「この町のどこかに里砂がいるのかァ」って？
兵藤　そうそう。はるばる来ちゃったからね。

間。

兵藤　悪かったね。カオルちゃんまでこんなとこ付き合わせちゃって。
倉橋　全然！　いいのいいの。お陰でなんていうか、人のこう、死にっぷりについても考えるきっかけになったし。
兵藤　フフ。まあ、確かに。自分がいかにぼんやり考えてたか、ってのを思い知ったよね。
倉橋　ねー。複雑な問題がこう――（身振り）

間。

倉橋　里砂はさー。
兵藤　うん。
倉橋　やっぱ病気のことが、よっぽどだったのかね？
兵藤　んー、よっぽど？
倉橋　こんなとこまで来ちゃってさ。あんたにも黙って。
兵藤　――なのかもね。あちこち痛みがあるみたいなことはいってたし。
倉橋　やっぱり痛いものなんだ？
兵藤　みたいよ。頭痛もしんどそうだったし。
倉橋　え？　レントゲンとかにも写るわけ？　その、言葉の癌ていうのは。

兵藤　や、そういうのは無いみたい。だから手術もできないって。
倉橋　んー、白血病みたいな感じ？
兵藤　そう、なのかな――。説明されたんだけど、よくわかんなくて。
倉橋　そっかそっか。――いろいろ言われても、ね。そんな冷静に聞いてらんないもんね。

間。

兵藤　大丈夫なの、仕事？　辞めちゃって。
倉橋　ああ、あたし？　まあね。

一拍。

倉橋　や、あれは、実はちょっと、正確なアレじゃなくてさ。
兵藤　ん、なにが？
倉橋　辞表、叩きつけてきたってやつ。
兵藤　あー、そうなの？　え、じゃあ、辞めてないんだ、仕事？
倉橋　うん。クビになったから。正確には。
兵藤　――ああ。
倉橋　というかね、言いたいこと言ってやった、ってわけでもなくって。
兵藤　ん・ん？　どういうこと？
倉橋　いや、単に休みがちだったからクビ切られただけ、っていうかさ――。流石に同僚も味方してくんなくて。

間。

兵藤　また新しいとこ見つければ――。
倉橋　そうね・そうね。
兵藤　やっぱ強いもん、資格あるって。
倉橋　あー、無いんだけどもね。
兵藤　ん、無いって、え、――資格？
倉橋　うん。
兵藤　あ、え？　無いの？
倉橋　だからそれも違うんだよ、流れでそういう話になっちゃったっていうか、本当は別にな
　に経理の事務をしてるってだけで。
兵藤　じゃあ、あ、会計士じゃないだ？
倉橋　全然・全然。あんな試験受かるわけないし。簿記持ってるってだけで。
兵藤　ああ、簿記。――二級とか？
倉橋　三級？

一拍。

兵藤　結構、違うね。
倉橋　ごめんごめん。嘘つくつもりは無かったんだけど、
兵藤　え、え、――リサとは友だちだったんだよね？
倉橋　いやいや、そこは疑わないでよ！　友だち！　現在もちゃんと友だち！
兵藤　やあ、なんか不安になっちゃって、
倉橋　まあ、確かに。――それが一番怪しいかもだけど。
兵藤　そこは自信持っててよ。
倉橋　だって、さあ？　こんな時に連絡もらえないなんて、めっちゃ凹んだんだけど、
兵藤　いや、誰にも連絡してないだけだって！　リサが元気な頃はホント、カオルちゃんの話ばっかりしてたもん。
倉橋　（驚いて）へー、あ、そうなんだ？
兵藤　ホントホント。――悪口メインだったけど。
倉橋　ちょっとォ！
兵藤　や、でもね！　他の友だちのことなんてあんま話題にもなんなかったし。やっぱりなんていうの、一番気になってたんだと思うよ。
倉橋　だったらちょっと、相談ぐらいしてくれたっていいじゃんか。
兵藤　んー、まあ、それを言ったら、俺だって最後、相談はされてないわけだし。
倉橋　ああ、そっか。――そういうことになるか。
兵藤　だから、正直さっきの話とかも身につまされちゃって、
倉橋　ええ？
兵藤　なんかあの、安楽死は誰かに死を託してるんだ、とかなんとか言ってたじゃない？
倉橋　ああ、言ってたね。うん。
兵藤　リサはやっぱり、ああ、最後、俺に託そうとは思えなかったんだよなあ、って。

間。

兵藤　まあ、でも、言いづらかったってのもあんだよな。リサはホラ、おしゃべりも好きだったし、本読むのとかも好きだったじゃない？　だからそういう、なんだ、――しゃべれなくなった自分ていうのがすごくその、――辛かったんだよね、きっと。だから、――怖かったんじゃないかな。自分が自分じゃなくなっちゃう、ていうかさ。
倉橋　――さすが。よくわかってんじゃん。
兵藤　え？　なにが？
倉橋　いや、――なんで里砂がこんなとこに来たのかって。
兵藤　ああ。いや、――全然、なんもわかってないんだよ。
倉橋　（励まして）なあんでだよ！

間。

倉橋　なんもないなあ――。これがなかったらあたしがあたしじゃなくなっちゃう、とか？
兵藤　そんなことはないんじゃない？
倉橋　あんたある？　これが無かったら自分が保てないっていうようなさ？
兵藤　――あるよ、そりゃ。
倉橋　なに？
兵藤　だからまあ、――リサ？
倉橋　（呆れて）聞いたあたしがバカだったわ。
兵藤　いやいや、ホントに！　ホントにそうなんだよ！
倉橋　★わかってる・わかってるよ、そうだよね。

間。

兵藤　なに？
倉橋　ガチで無いな、あたし。
兵藤　そう？
倉橋　うん。なんか昔はあったような気もするんだけど、でも、だんだんとなに、大切なものなんか何も無くてもいっか、って。無くてもどうにかなるか、って。そう考える癖がついてきちゃったのかもしれないね。

一拍。

兵藤　寂しいんだか、たくましいんだか、ね。
倉橋　まあ、トシ喰ったって話よ。
兵藤　それはお互い、間違いない。
倉橋　――里砂も来るのかね？　明後日。
兵藤　パーティ？
倉橋　うん。
兵藤　――来るといいなあ。

場面転換。

三幕　生前葬パーティ

【一場】　パーティ会場・控室

パーティ会場の近く。控室のような場所。

◎　控室にて　その１　蜂ヶ谷、純

舞台中央付近に里砂、純がいる。
純は緊張した様子。里砂は上着、帽子着用。さらにマフラーをして寝ている。
少し離れて蜂ヶ谷。その反対側に蟹江がいる。蟹江から少し離れて漆原、座間がいる。

蜂ヶ谷　ねえ。――ねえ、ちょっと、
純　え、ああ、はい。
蜂ヶ谷　ちょっと拾ってくんない？
純　ああ、はい。ちょ、ちょっと待ってください。

純、蜂ヶ谷の足元に落ちたタオルを拾ってかけてやる。

純　どうぞ。
蜂ヶ谷　――なんか使いづらそうなアレだね。
純　いや、便利です。釘とか打てますんで。
蜂ヶ谷　釘、――とか打てるんだ？
純　はい。カーンカーンカーンつって。
蜂ヶ谷　――ああ、そう。
純　――くだらない話でしたね。
蜂ヶ谷　★いやいや！　丁度いいよ。なんか緊張してたから。
純　え？　ああ。緊張、するもんですか？　やっぱり？
蜂ヶ谷　フフ。この期に及んでなァ。気が小せえのかなァ。
純　（苦笑して）どう、でしょう。

一拍。

蜂ヶ谷　ありがとね。もう、大丈夫だから。
純　ああ、――なんかあったらいってください。

蜂ヶ谷、了解、の合図。
純、蜂ヶ谷から離れ、里砂の傍へ。

◎ 控室にて　その2　純、里砂

間。

純　あの、もしもの話なんだけどさ、

里砂　――（起き上がろろうとする）

純　あー、別に無理に話そうとしなくていいから。聞いといてくれたらいいんだけど。

里砂　――（再び横たわる）

純　もしあの、旦那さん来たらどうする？　健人さん。

里砂　――

純　どうするって言われてもねえ。――お話しとかする？　や、もし、お姉ちゃんが会いたくないっていうんだったら、会わないでいい感じにするからさ。ちゃんと追い返して。と、思って。

間。

純　会う？

里砂　――

純　そっか。――そうだよね。あたしもこういうの苦手だしさ。まあ、じゃあ、いっか。

間。

純　久しぶりだね、お姉ちゃんとこんなふたりでさ。っていっても、あたしばっかりしゃべってるからアレだけど。――ねえ？

間。

純　邪魔はさせないから。誰にも。うん。安心してていいからね。

里砂、純に手招きする。

純　ん？　なに？

里砂、少しだけ純に触れる。

純　うん・うん・うん。

◎　控室にて　その3　キツネたち

間。

漆原　ねえ。――ちょっと、――ねえ。

座間　静かにしてろ。

一拍。

漆原　ねえ。――ねえ。――ねえってば（座間に触れる）

座間　なんだよ、うるせえな。触んなよ。

間。

漆原　うちらどうなんの？　ホッキョ区が特区から外されたらさ。

座間　さあな。関係ねえだろ。キツネには。

漆原　関係ねえわけねえだろうが。

座間　――なんで？

漆原　だってそりゃ、人間たちだってまた少なくなんだろうし、

座間　むしろいいことじゃねえか。

漆原　そうはいかねえよ。今じゃあいつらと暮らすのが当たり前になってんだから、

蟹江　オォイ！

漆原　はい、はい。

座間　すみません・すみません。

蟹江、奇妙な歩き方で近づいてきて、

蟹江　静かにしてろ。

座間　はい！　静かにしてます！　はい！

蟹江　わかってんのか？

座間　はい！　わかってます！　はい！

蟹江、戻る。

間。

座間　（漆原）お前のせいでまた怒られたろうが。

漆原　なんであたし／あんただって話してたじゃんか。

座間　★おめえが話かけて来たからだろうが、

漆原　無視すれば良かったろ？　ガン無視しとけばよ。
座間　おお、上等だ。そんじゃ、今度お前が話しかけてきてもガン無視するからな？　わかったな？

漆原、無視する。

座間　ちょい、ちょい、わかったか？

漆原、無視する。

座間　ちょっと、ねえ、わかった？　無視するから？　ねえ、今度お前が話しかけてきたら無視するからね？　え、ちょっと、聞いてる？　無視するから！　ねえ！　ねえってば。無視！　無視するからねホント！　ねえ！
蟹江　オォイ！
座間　はい、すみません、はい。

蟹江、さっきより早く、奇妙な歩き方で近づいてきて。

蟹江　（蜂ヶ谷を指し）集中してらっしゃるだろうがよ。
座間　はい、すみません、はい。

蟹江、漆原をじっくり見て。
蟹江、漆原が無視できないような邪魔をする。（顔面に尻を近づけるなど）
漆原、無視を続ける。

蟹江　――見ろ、こいつを。石像のように静かじゃねえか。
座間　いや、こいつはさっきまで、
蟹江　んん？
座間　はい。石像っす。はい。
蟹江　わかってんのか？
座間　はい。わかってます。はい。
蟹江　――なに、なんかお前、「はい」で単語をサンドイッチしないとしゃべれねえシステムになってるの？
座間　――はい？
蟹江　「はい、石像っす、はい」「はい、わかってます、はい」。

一拍。

座間　はい。なってないっす。はい。
蟹江　★なってんじゃねえか！　しっかりそのシステムを遵守してるじゃねえか。
間。
蟹江　え、線香ってさ、燃えたらあとに何が残るの？
座間　はい、灰っす、はい。
蟹江　――（満足気に）当然のことだな。え、赤ちゃんってさ、つかまり立ちできるようになる前はどうやって移動すんの？
一拍。
座間　［はい、ハイハイっす、はい。
蟹江　［はい、ハイハイっす、はい。
ふたり、ゆっくりハイタッチ。
蟹江　はー。つまんねえ。

◎ 控室にて　その４　純、里砂、葉一郎、蜂ヶ谷。

葉一郎、登場。
葉一郎　純―、純―？
蟹江　おう、なんだお前？　ダメだよ、関係者とキツネ以外、立入禁止だぞ。
葉一郎、ふてくされた顔。
蟹江　なんだその顔は。
葉一郎、おもむろにタッパーに入った油揚げを取り出す。
蟹江　油揚げ！　――なら話は別だ。来い。ちょっ、いいから来い。
座間、漆原、蜂ヶ谷が来て油揚げを持っていく。蜂ヶ谷だけ二枚持っていく。
以後、黙認。
葉一郎　里砂――。

里砂　――

純、登場。

葉一郎　あ、純。

純　兄ちゃん、なにやってんの？

葉一郎　え、いや、キツネに油揚げを、と思って――。

純　★はあ？

葉一郎　★いや、お前らが急にこんなとこに来るから俺だって――。

純　ええー？　ちゃんと手紙書いたのに。（里砂に）ねえ？　あたしもお姉ちゃんも。

里砂　――

一拍。

葉一郎　そんな顔すんなよ。

純　なにそんな顔って。

葉一郎　いやなんか、「そういうのもういいからっ！」みたいな。

純　誰、それ？

葉一郎　お前だよお前、お前の心の声だよ、「そういうのもういいからっ！」「そういうのもういいからっ！」「そういうのもう／

純　ちょ・ちょ・ちょ、――誰だよだから？　え・わかってんなら来ないでよ！

純、ギプスを葉一郎に投げつける。

葉一郎、驚くものの、それを拾って純に返してやり、

葉一郎　イヤなんだよ。まあ、里砂は病気だからともかくとして、お前はなんか、――違うだろう？

純　はあ？

葉一郎　ああ、知ってるよ。お前がそんな、昨日今日思いついてこんなことを言い出したわけじゃないってことはよく知ってる＝

純　＝だったらもう［いいでしょ、

葉一郎　［だけどさ、だけどだよ、それは違うだろって。お前は違う。何をそんなに急ぐことがあるんだよ？

純　あたしなりに十分考えた結果だよ。

蜂ヶ谷　お兄さん、ちょっといい？　ちょっと？

葉一郎　ああ、ごめんなさい。

葉一郎、もう一枚、油揚げを渡そうとする、

蜂ヶ谷　いや、そうじゃねえって、これはもういいから。
葉一郎　あ、いいんですか？　もう？
蜂ヶ谷　そういう熱い説得はね――。なんか、難しい年頃だ。
葉一郎　――はあ。
蜂ヶ谷　お兄さんの言いたいこともわかる。けど、その言い方だと多分、伝わらない。なんか、逆効果。
葉一郎　じゃあ、どうしろっていうんですか？

間。

葉一郎　そうか！　これは気づきませんで！

葉一郎、気づいたようにタッパーごと油揚げを渡そうとする、

蜂ヶ谷　もういいっていってんだろ！　――そうじゃねえって。
葉一郎　（憮然として）これじゃ足りませんか？　じゃあ一回ホテルに戻って、
蜂ヶ谷　★だから食べねえって！　一応、瀕死のキツネなんだから俺は。
葉一郎　――教えてくれないんですか？
蜂ヶ谷　放っときゃあいいんだよ！　――自分で決めるしかねんだから。自分の、命の問題は。

蟹江、近づいてきて、

蟹江　蜂ヶ谷さん、そろそろお時間です。

蟹江、蜂ヶ谷をエスコートして舞台中央へ。

【二場】 倉橋の寝室／パーティ会場・ステージ

◎ 生前葬パーティ

蟹江　どうですか？　今のご気分は。
蜂ヶ谷　すげえ穏やか。全然、悪くない。
蟹江　痛みはありますか？
蜂ヶ谷　――そりゃ多少はね。むしろ痛みが残るように調整しとかないと、こんな風に話ができなくなっちまうからさ。

一拍。

蟹江　蜂ヶ谷さんはどうして安楽死という方法を？
蜂ヶ谷　――まあ、簡単に言やあ、キリがないからね。全身、管だらけになって、点滴ぶち込まれて？　そんな溺れるみたいな最期はくだらないからさ。
蟹江　最後の最後までがんばるのが自然だ、という方もいらっしゃいますが。
蜂ヶ谷　フフ。自然なんて言い出したら風邪薬飲むのだって十分不自然だろうがよ。
蟹江　ええ、まあ、
蜂ヶ谷　それに、ベッドでずっと寝ているだけになって、うわ言ばっかり呟くようになって、とかっていうのはね。――不安だよ。何言い出すかわからないし。

間。

蟹江　もともと、自殺願望のようなものがあったんですか？
蜂ヶ谷　ないない！　一切ないよ。こう見えて結構、人生を楽しんきたタイプだから。
蟹江　でしたら、そういった人生観と安楽死という選択は、矛盾しないんですか？
蜂ヶ谷　――しないね。だって人生に絶望して自殺するとか、そういうことではないから。与えられた選択肢の中でベターな道を選んでるだけ。
蟹江　じゃあ、もし仮に、今からでも元気になれるとしたら、――どうです？
蜂ヶ谷　――また旅行にでも出かけっかな。
蟹江　旅行？
蜂ヶ谷　うん。旅行が好きだったからね。元気になれんなら、またどっか行きたいよ。あんまり、金の掛かんねえところに（笑）
蟹江　でも、治療を続けていれば奇跡的な回復が起きるとか、闘病中に新しい薬が開発されるとか、そういった可能性もゼロではありませんよね？
蜂ヶ谷　（笑って）説得しようとしてんの？
蟹江　（笑って）いや、そういうわけじゃ――。

一拍。

蟹江　未練はもうない、ということですか？

蜂ヶ谷　あるよ。ある。――ものすごく未練があるし、ものすごく後悔もあるし。うん。ものすごく怖いしね。

蟹江　だったら、――いや、これは説得ではないんですが、もったいない、ということは無いんですか？

蜂ヶ谷　確かにもったいない。――まだ諦めずに粘ってれば、もうちょっとだけは粘れるんだしね。こうやって話もできるわけだしな。

蟹江　はい。そうですよね。

蜂ヶ谷　でも、――希望を持って絶望して、また希望を持って絶望して、っていうね。そのサイクルにもくたびれちゃったし。もうじき、ね。痛みも、意識も、コントロールできなくなるわけだから。

間。

蟹江　亡くなったあとには、どうなると思ってらっしゃいますか？

蜂ヶ谷　どう？　天国とか地獄とか、そういう話？

蟹江　そういうことも含めて。

蜂ヶ谷　――んー。俺はいいかな。どっちかっていうと、きれいに消えたい。この人生はここで終わり！　――それでいいんじゃないかな。

蟹江　怖くないんですか？

蜂ヶ谷　だから怖いって。ものすごく怖いよ。でも、生きてくことだって大分怖いからね。一緒だよ。

一拍。

蟹江　――なにか、これを見てくれている人たちに向けて、メッセージは？

蜂ヶ谷　そんな大層なもんはねんだけどさ。

蟹江　いや、ぜひ、一言だけでも。

蜂ヶ谷　――まずはこういった場を設けてくれてありがとう。なんかね、こんな状況でもまだやれることがあるんだ、って思えたのは、救いだよ。

蟹江　救い？

蜂ヶ谷　なんの役にも立たねえなんて、そんなシケた話はねえからさ。俺にとってはここまでが人生。みなさんにとっては、このイベントも含めてみなさんの人生。――なんらかの形で活かしてくれたらな、って。

間。

蜂ヶ谷　後悔しないように、とは言わないよ？　絶対に後悔は残るもんだから。だけど、やれるだけのことはやっといたほうがいいんじゃないかな。やれることだって、あるんだから。
蟹江　やっぱり、後悔は残りますか？
蜂ヶ谷　そりゃあね。
蟹江　それは、どんな？
蜂ヶ谷　――いろいろだよ。

間。

蟹江　生まれてきて、良かったですか？
蜂ヶ谷　さあ？　どうだろう。
蟹江　もう一回、改めて生まれてくるとして。仮に、もう一周、やれるとして、ですよ？　そしたら蜂ヶ谷さんは、もう一周、やりますか？
蜂ヶ谷　もう、わからないよ、それは。――いろんなことが過ぎてっちゃったからなあ。――もう一周いくかどうかは、もう、それはわかんないな。

間。

蟹江　どうして自殺ではなくて、安楽死なんですか？　ご自身で、まあ、なんらかの方法で自裁する、という選択肢もあったはずですよね。
蜂ヶ谷　――その方が手っ取り早いしな。でも、幸いにしてホッキョ区にはこういう、自己決定を尊重してくれる制度があって、骨のあるスタッフも揃っているわけじゃない？　最後はお任せしようかな、と思ってさ。

間。

蟹江　ありがとうございました。本当に貴重なお時間を。
蜂ヶ谷　ああ、うん。それじゃあ、みなさんもどうか、死ぬまではお元気で！

ルナール、いつからか登場していて。

ルナール　では、――実際の施術に入りましょうか？
蜂ヶ谷　はい。いつでも。

◎　ルナール・倉橋

倉橋、ルナールが舞台上の別の場所に登場。

ふたりは事後のような親密な距離感。

倉橋　やっぱり嫌なもの？　お仕事とはいえ、ああいうことをするのって。
ルナール　――なにが？
倉橋　人の命を奪うっていうのはさ。
ルナール　意地悪な言い方だなあ。
倉橋　ごめん。

一拍。

ルナール　あたしがやってるのは、あくまでお手伝いなんだけど？
倉橋　そうは言ってもさ。なかなか割り切れないものなのかなあって。
ルナール　あたしは十分、割り切ってんだけどね――。みんなが不安になるんだろうね。あたしみたいな立場のもんが、なんらか罪悪感みたいなものを感じていないとさ。「人を殺して喰う飯はうまいかー」って。
倉橋　いや、ごめんごめん。そういう意味じゃ無かったんだけど、
ルナール　いいのいいの。だいたいの医者は感じるみたいだしね、そういう、居心地の悪さ。

一拍。

ルナール　勘違いしないで欲しんだけどね、あたしが担当した患者さんは死にきれずに生き残る人が多いからね？　村野さんみたいな優しいお医者さんよりずっと。
倉橋　そうなんだ？
ルナール　ホラ誤解してる。
倉橋　や、なんか死んでもいいんだよー、ってすごい背中押してそうだから。
ルナール　そりゃ押すけどさ。でも、ちゃんと説明もするから。これからあなたの身体に起こることはどんなことか、って。

一拍。

ルナール　静脈注射で楽になれるお薬をグーッと押し込んでいってあげるとね、お薬に入ってるバルビツール酸誘導体が、大脳皮質からはじまってだんだんと、中枢神経を麻痺させていってさ、身体全体が深い深い眠りの状態に落ちていくわけよ。スーっとね。それで、だんだんと呼吸中枢の神経が麻痺していって息が出来なくなっていって、心臓が止まっちゃう。

一拍。

ルナール　患者さんは最初のお注射をする時のチクっとする痛みを感じるだけで、あとは一瞬で意識を失っちゃうらしいんだけどさ――。一回お注射をしたら、あとはもう、心臓が止まるまで確実に、大きい機械の主電源を落とす時みたいに少しだけ時間はかかるけど、確実に命がシャットダウンされていっちゃう、っていうのはさ、なんだかゾクゾクするものがあるよ。

一拍。

ルナール　――ここだけの話、楽しくてしょうがない。

倉橋　楽しいって、そんな。

ルナール　あれ？　あんたまでそんな建前いう？　楽しいに決まってるじゃん。生きるか、死ぬか、そういった場面ですら自分が能力を発揮できるっていうのは何ものにも代えがたい喜びだよ。

倉橋　――人を殺すことが楽しいの？

ルナール　命を支配することがね。

倉橋　うーん。支配かあ。

ルナール　セックスだってそうでしょう？　相手をイカせられたらうれしいじゃない？　そこには愛情があるのかもしれないし、性欲もあるのかもしれないし。でも、それだけじゃない。

倉橋　誰かを思い通りにできた、ってことが楽しい？

間。

ルナール　本当はみんな楽しいんだよ。だけど、そういうことを楽しんではいけない。楽しむのは悪いことだって、そう、思い込もうとしている。

倉橋　趣味が悪いんじゃないか、って？

ルナール　まあ、趣味は悪いでしょ。それは自覚してるから。――そもそもいつ死ぬか、なんて、いつ生まれるか、と同じくらい、自分じゃ決められないことでしょう？　ほんの少しタイミングをズラしただけで、自己決定だの死ぬ権利だの、大げさだよ。結局、あたしたちにはなんにも決められないんだから。

一拍。

ルナール　絶対にコントロールできないことを、一瞬だけ思いどりにできたのかもな、って思うから、少しだけ楽しいんだろうな。

間。

倉橋　すこし私、あんたのことが怖くなってきたよ。

ルナール　あたしだってあんたが怖いよ。

倉橋　あたしが？　どうして？
ルナール　生きてる人はみんな、もうすぐ死んじゃう人だから。
倉橋　ルナールも誰かが死んじゃうのが怖いなあ、なんて思うんだ？
ルナール　――どっちも本当だよ。大切な人を支配することは楽しいけど、大切な人を支配したがってる自分は虚しい。――もう生きられないとわかっているのに、生き続けようとするのは哀しいけど、もっと生きたかった誰かの一生を、この手で終わらせてしまうことは苦しい。
――全部、本当だよ。

蜂ヶ谷が安楽死を遂げる。
場面転換。

【三場】　パーティ会場・付近

◎　キツネの問題

蟹江、漆原、座間が舞台上に残る。
キツネの住処。どこかの洞穴のような場所。

漆原　あたしは帰れないと思うな。――今さら、山になんて。
座間　どうして？
漆原　もう山は開けちゃったし、うちらだって、なんかが開けちゃった気がするよ。
座間　なあんだ、それ。
蟹江　知ってんだろ、お前だって。
座間　――なにが？
蟹江　こいつんとこのガキは、人間の助けがなけりゃ生きられない。
座間　――ふん。なんとかなんだろ。
蟹江　ならねえよ。
漆原　うちの子は――

間。

漆原　自分じゃ歩けねえし、それどころか、人間の道具がなけりゃ息をすることもできねえ。
座間　道具なんて、――昔は全部無かったもんだろうが。
蟹江　でも、今はあるんだ。

村野、増田、登場。

村野　こんばんはー。
漆原　ああ、先生。
蟹江　どうぞ、どうぞこちら、どうぞ。
村野　友達も一緒なんだけど、大丈夫かな？
漆原　もちろんです、そんな。
蟹江　じゃあ、そっちの方もお医者さんで？
増田　ああ、はい。あ、増田と申します。
蟹江　どうもどうも、何もねえとこで。ああ、モグラの煮っころがしならありますけど、
増田　いえいえ、それは、大丈夫です。
漆原　それで先生、うちの子は？
村野　いちばん、大変な状況は、なんとかまた――。
蟹江　［おお。

漆原　［良かった。あー、本当に良かった。
蟹江　強い子だ。
座間　しぶてえ。さすがおめえんとこのガキだ（笑）
漆原　★うるせーよ（笑）
村野　蜂ヶ谷さんはああいうことになってしまいましたが、うん。何のお力にもなれず――
蟹江　★いやあ、いいんです・いいんです！　ホントに、いい気持ちでやったことなんだから。
村野　ええ、ええ。
漆原　先生。でも、やっぱりあたし、ああいうのがあると心配だ。

間。

漆原　寝てばっかりだったら生きていたくねえ。旅行に行けないんだったら生きていたくねえ。そういうことを蜂ヶ谷が言うのはいい。でも、――自分でものが食べられねえ、自分で便所にもいけねえ、そんなら、生きて行かなくてもいい。そうなったら、うちの子はどうなる？　うちの子は、始めから生きていかなくてもいい命か？
座間　――そう興奮すんなって、
漆原　興奮なんかしてねえよ。いや、――興奮なんかしてる。もう大興奮た。ポッポ・ポッポしてる。
座間　なに？
漆原　先生にも言われた。うちの子の事を言ってんじゃない、それぞれの命の選択だ、って。
村野　そうでしたかね。
漆原　けど、本当に大丈夫か？　知らねえうちに、なんでそこまでして生きてんだよ、って。蜂ヶ谷みてえのが普通になっちまったら、なんでまだ生きてんだ？　って。そんなにがんばんなくていい。無理しなくたっていい。生きていなくたっていい。――そういう言葉が、いつかうちの子を殺しませんか？　大丈夫ですか？　先生？

一拍。

村野　とても危険なことだと思いますよ。私も。
座間　なにもそんな、全員が蜂ヶ谷さんみたいな死に方をするわけじゃねえよ。
漆原　わかってるよ。
座間　ホントかよ？
漆原　わかってるって！　でも、心配なんだよ。
蟹江　大丈夫だ。――（村野に）先生、ああ、そっちの先生も、
増田　はい・はい。
村野　なんでしょう？
蟹江　キツネは――

一拍。

蟹江　与えられた命を最後まで全力で生きます。

増田　ええ。

蟹江　毎朝、毎晩、神様んとこと人間のとこを行ったり来たりして、それぞれ全力で生きるんです。最後まで、諦めんな。辛くても、死ぬな。歯を、ちゃんと磨け。夜更かしも、ほとほどに。食べ過ぎは、太るよ。賭け事は、どうせやるなら、やっちまえ。お酒はぬるめの、燗がいい。

村野　あのー、それは？

蟹江　★そう言ってお互い励まし合って、――自分じゃ生きてけないような、ばあさんや、赤ん坊を、誰かが助けて。小さいもんの中にも、大きい命が宿っているよって。みんな、神様が宿っているよっていって。そうやって、生きていくんです。

村野　ええ。

一拍。

増田　私たちは、違いますね。

一拍。

村野　少し、器用になりすぎたのかもしれないね。

場面転換。

四幕　再び、てぶくろをかいに

【一場】　パーティ会場・控室

◎　里砂、葉一郎、純。

純と里砂がパーティ会場の通路を歩いている。里砂は帽子、マフラーを着用。
葉一郎、登場。

葉一郎　里砂、おい、里砂。
純　なに、まだなんかあるの？
葉一郎　あるよ全然／里砂はどう思うんだ、純のこと？
純　やめてよ、もう、
葉一郎　里砂はいいのか、純も一緒に安楽死するっていうことで？　どうなんだ？

間。
里砂、首を横に振る。

純　［ええ、なんでよ？
葉一郎　［な？　そうだよな？　ほらー。里砂だってこう言ってるぞ。
純　なんも言ってねえし。ていうか、姉ちゃんに言われて来てるわけじゃないからさ。
葉一郎　そうか。
純　当たり前でしょ。

里砂かよろめいて倒れそうになる。
葉一郎、それをとっさに支えて、

葉一郎　座るか？

葉一郎、近くのベンチに里砂を座らせようとするが、里砂がそれを拒絶する。
葉一郎、ひとりでそのベンチに腰掛ける。
一拍。

葉一郎　まあ、――純はある意味、里砂なんかよりずっとずっと長い間、死について考えてきたんだろうと思うよ。
純　はあ？

一拍。

葉一郎　誰がどう止めたって死ぬ人は死ぬ。――で、それが安らかな時も、ある。自殺は罪だよ、って誰がいったって安らかに自殺する人は、ちゃんと、いる。――精神的な理由で安楽死する、なんていうことが、良いことなのか悪いことなのかわからないけど、事実、――幸せに安楽死する人は、いる。

間。

葉一郎　だから、純も死んだっていいんだと思う。もう、止めないよ。どうしてもっていうなら俺が手伝う。

純　手伝う？　兄ちゃんが？

葉一郎　おう。

間。

純　だから、その時が来るまではがんばって生きなさい。っていうことかな？

葉一郎　★いや、がんばらなくていいし、生きなくていい。死にたい時に死ねばいい。

一拍。

葉一郎　そして、それは俺に対しての裏切りでもないし、誰に対しての罪でもない。――これは別に、ヤケクソになって言ってるわけじゃないぞ？　ホントに。そう。ホントにそういってる。

間。

純　そう。

葉一郎　うん。

純　じゃ、やめないからね、あたし？

葉一郎　手伝うっていってんだろう。

間。

純　これであたしがさあ、やっぱやーめた、なんて言ったら、単にかまってほしかっただけみたいじゃんね。

葉一郎　――かまってほしくない人なんていないだろう。

純　まあ、そうだけどさ。でも――

葉一郎　うん。でも？

間。

純　かまってもらえたらそれで上手くいくってわけでもないんだよね。

葉一郎　――そうか。

純　なんかさあ、（頭の右上のあたりを示して）いつもここんところに、いや、別にここんところって決まってるわけじゃないんだけど、いつもなんか、――落ち込んでる時とかに、ああ、いや、うまくいってる時でもそうなんだけど、急にさ、こう、出て来るやつがいて。

葉一郎　――出て来るやつ？

純　うん。なんか、いて。困った感じのさ。また会っちゃったね、みたいな？　そういうやつがいて。

葉一郎　うん。

純　そいつが出てくるといつも、――ああ、もうダメかもなあ、ってなっちゃって。まあ、いいか。もう、いいや。ってなっちゃって。

一拍。

純　なに言ってんだろう。ハハ――わけわかんないね、あたし。

葉一郎　わけわかんなくないよ。ちっとも。

長い間。

葉一郎　せめて見届けてやらないとな。

純　え？

葉一郎　ちゃんと付いていてやれよ。

純　ああ、お姉ちゃん？　うん。あったりまえじゃん。

葉一郎、頼んだぞ、の仕草。のち、退場

◎　里砂、純、倉橋。

倉橋　里砂、里砂。

里砂　！――

倉橋　や！　久しぶり。

里砂　――

倉橋　びっくりした？　大丈夫・大丈夫、あたしもびっくりしてるから。

里砂　――

純　あ――。

倉橋　そんでどうなの？　具合は？
里砂　――（首を横に振る）
倉橋　そうだよね。――元気だったらこんなとこ来ないよね。
純　すみません。もう、あんまり言葉が出なくなっちゃったみたいで。
倉橋　ねえ／ていうか、言ってよ！　相談してくれればよかったのに。
里砂　――。
倉橋　どの口でそれを言うって？　まあ、確かにね。
純　姉のお友達の方――？
倉橋　★ああ、そうそう。倉橋です。妹さん？
純　はい。なんか、ここ数日でガクっと来ちゃいまして。
倉橋　ああ。
純　まあ、今までが無理してただけのかも知れないですけど。
倉橋　え、帰る気はないの？　ふたりとも？

純、無言。

倉橋　だよね、そりゃ。

倉橋、腰を下ろし、

倉橋　まあねー。この人、頑固だしねー。
純　ああ、そうですか？　頑固？
倉橋　そりゃあ酷かったんだから、わがままで。
純　へー？　姉がですか？
倉橋　そうだよ。いや、うちら同じ映研にいたんだけどね、ああ、映画研究会？　もう撮影・始まってるっていうのに、「こんなつまんねー映画なんか出ない！」とか言い出しちゃって。
純　へー。
里砂　（驚いて聞いている）
倉橋　ってまあ、それはあたしなんだけど。
純　ええ？
里砂　（頷く）
倉橋　わがままだっだからなー。もう里砂にもいっぱい迷惑かけて。
純　まあ、なら、なんか納得です。
倉橋　あ、そう？
純　姉がそんなわがままなんて、イメージ無かったんで。
倉橋　へー。やっぱいいお姉ちゃんしてた？
純　んー、まあ、ヤなとこもいっぱいありますけどね（笑）
倉橋　フフフ。――実はうちら結構ね。激しい喧嘩をしたことがあって。

純　ホントですか？
倉橋　ウソじゃないよ、今度は。まあ、つまんないことだったんだけどね。あたしが会おうって言ってた約束をすっぽかしちゃって。珍しく里砂もちょっと怒っちゃって。でまあ、当然あたしは逆ギレっていう――。
純　ええ――。（里砂に）そうなの？
里砂　――
倉橋　謝れば良かったんだろうけど、お互いもう大人になってからだったからそれで縁が切れちゃって――。あの時はごめん。
純　って、え、今？
倉橋　この際だし。や、あたしも自分が悪いのはわかってたんだけど、なんか怒られてたらムカついて来ちゃって。ふざけんな、みたいな？　だからそれ以来会ってないもんね。
里砂　――
倉橋　だから里砂ともう一回こう、ね。会ってお話しできるなんて思ってなかったから。うん。いいきっかけもらったよ。

一拍。

倉橋　いつなの、その、予定は？
純　もう、そんなずっと先ってわけじゃないですけど。
倉橋　いつ？
純　――（里砂に）いっていい？
里砂　――
純　えーと、だからあの、今日です。

いつからか、ルナールが登場していて、

ルナール　そろそろ、お時間です。

ルナールが里砂を会場へ連れて行く。

【二場】　パーティ会場・ステージ

◎　てぶくろをかいに　旅情編

里砂は到着するやその場にへたり込む。
ルナールもしゃがんで声をかける。

ルナール　どうですか？　今のご気分は。

里砂　――
純　悪くはないと思います。ちょっと緊張してるとは思いますけど。
ルナール　痛みはありますか？
純　――酷くはないです。村野先生にいい薬もいただきましたんで。
ルナール　そいつは結構。それじゃ、今日はゲストをお招きしてますんで、さっそくお呼びしましょうかね。
純　ゲスト？
ルナール　兵藤さん。兵藤健人さん。
兵藤　はい・はい・はい。

兵藤、登場。

ルナール　どうぞどうぞこちら。せっかくですから、最後、おっしゃりたいことを。――（純に）お嬢さん。

ルナール、純を促して一緒に退場する。

兵藤　ああ、あの。

兵藤、リュックを里砂の前に出し、

兵藤　買ってきたよ。
里砂　（？）
兵藤　――てぶくろ。
里砂　（！）
兵藤　いったでしょ？　買ってきてねって。
里砂　――
兵藤　そりゃ買ってくるでしょ？　頼まれたんだから。でも、どんなのがいいかわかんなかったからいろいろ買ってきたんだよ。ちょっ、見てみて。

兵藤、買ってきた手袋をたくさん出す。

兵藤　まず王道のガチであったかいやつ？　スキー用。そんでおしゃれな感じ？　そんでこれは実用性？　手袋をしたままいろいろ画面タッチとかできるやつ？　と思ったけど、もう使わないよね、そういうのは。で、まさかとは思ったけど、これとか？　これとか？

里砂、ひとつのてぶくろを選ぶ。（※ボクシング・グローブ？）

兵藤　ああ、それ？　マジで？　ああ、結構意外なのいったね。
里砂　――
兵藤　ダメじゃない・ダメじゃない。全部リサのために買ってきたやつなんだからさ、好きなやつ選んでいいよ。
里砂　――
兵藤　もう俺はね、リサぴょんの頼みならなんでも聞くよ。なんだって聞く。
里砂　――
兵藤　ホントだよ。ホラ、ちゃんと買ってきたでしょ？

一拍。

里砂　――
兵藤　うん・うん。なに？

里砂、兵藤に一組のてぶくろを渡し、

兵藤　ああ、これ？　なに、これを俺がもらうの？
里砂　――
兵藤　わかった。うん。――ありがとう。大切に使うよ。
里砂　――
兵藤　他になんか無いの？　お願いは？　なんでも聞くからさ。なんか言ってよ。

一拍。

里砂　し――
兵藤　し？
里砂　なーせーて。

一拍。

里砂　ひーとーりーで。

間。

兵藤　嫌だ！　一緒にいるよ。わざわざこんな所まで来て／俺は絶対、リサぴょんと一緒にいる！　いるー！　絶対に！　絶対にリサぴょんと一緒にいるー！

長い間。

兵藤　なあんてねー。なあんちゃってねー。

一拍。

兵藤　――冗談だよ。冗談。わかってるよ。ごめんね。情けないね。しっかりしないと。ねえ。ホントに。俺はねえ、頼りがいのあるやつにならなくちゃいけない。俺は。いつも。リサと一緒にいて、いつもいつもそう思ってきたんだよ。頼りがいのあるやつでいなくちゃいけない。かっこよくてさあ。強くってさあ。そういうやつでいなくちゃいけない。――でもさあ、リサは俺といて一回でも、――俺を頼りにできたことなんかあったのかな？　って。そう考えたらさあ、なんか、一回も無いんじゃねえかな、なんて。本当に情けなくなっちゃってさあ。

一拍

兵藤　リサぴょんが居なくなってしまうんだったら、一緒に俺も居なくなってしまいたいよ。もう何もやりたいことなんか無い。リサぴょんのいない世界なんて何もないのと一緒だよ。誰もいないのと一緒だよ。つまらない。つまらないよ。

一拍。

兵藤　なあんてねー。なあんちゃってねー。

里砂、ボクシング・グローブで何度か兵藤を軽く叩く。

兵藤　（笑）おう。――おう、わかったよ。わかってるよ。

里砂　（更にパンチ）

兵藤　オッケーオッケー。元気出すぜ。もう余裕だよ。だって本質的に？　なんていうの、性格的に根っから元気あるからね、俺は。もう、ものすごい元気。ハッピーターンと間違えて防虫剤食っても、「おろ？　ミントが効いてるねえ」ってなもんだよ。ああ、そうだ。これこれ。これ持ってきたよ。これ。

「てぶくろを買いに」

兵藤　［てぶくろをかいに。

里砂　［てぶくろをかいに。

兵藤　あはは、りさぴょんだー。――んんん。

兵藤、もう一度、本を掲げて。

兵藤　［てぶくろをかいに！
里砂　［てぶくろをかいに！

一拍。

兵藤　――今度はリサがてぶくろを買ってくれよ。それ買って待っててよ、向こうで。
里砂　――
兵藤　どこに行っても、北極に行っても通用する、――っていうレベルのやつな。
里砂　――
兵藤　――二万円以上するやつな。

里砂、帽子を取ろうとするが、力が入らずうまく脱げない。

兵藤　なに、脱ぎたいの？

兵藤、帽子を手伝って脱がしてやる。同様に、手袋、マフラー、コートを順に脱ぐ。
里砂、立ち上がろうとするが苦戦する。
兵藤、それを手伝ってやろうとするが、里砂、拒絶する。
里砂、兵藤を押しのけたあと、再び立ち上がろうとする。
兵藤、再び手伝ってやろうとするが、やはり拒絶される。

兵藤　え、え？

里砂、どうにかして自力で立ち上がる。そして、なんとか両手を広げ、ハグを求める。
兵藤、なんとか立っている里砂を急いで支えてやるように抱きしめる。
ルナールが車椅子を持って里砂を迎えに来る。
ルナール、里砂をそれに乗せる。
兵藤、てぶくろ、絵本などを里砂に持たせ、先程脱いだ帽子、マフラーを着せてやる。
キツネの行列が現れる。
ルナールが行列とともに里砂を連れて去っていく。
兵藤はそれを見送る。
里砂が見えなくなった頃、兵藤はリュックに手袋の残りを入れ、立ち去る。
場面転換。

五幕　葬儀のあと

【一場】　葉一郎の家

◎　お疲れ

真由と葉一郎がいる。ふたりとも喪服。

真由　お話できた？　里砂ちゃんと。
葉一郎　うん。
真由　――じゃあ、行ってよかったね。
葉一郎　うん。
真由　――純ちゃんも帰ってこれて。
葉一郎　うん。
真由　ふふ。ちょっと疲れちゃったかね。

間。

葉一郎　（小さな声で）てぶくろを買って。
真由　え？
葉一郎　健人くんがてぶくろを買って。渡して来た。
真由　里砂ちゃんに？
葉一郎　うん。
真由　――そう。
葉一郎　――そんなに悪い所でも無かったし。そんなに悪い人たちもいなかったよ。
真由　――本当かしら。
葉一郎　本当だよ。

間。

真由　もう、おやすみになったら？
葉一郎　――そうしよう。

葉一郎、真由、退場。

エピローグ

◎　再びリーディング

再びリーディングの場。

里砂　　朝、布団の中で目を覚まして、――「なんだ夢か」と少し残念な気持ちになったあとで、でも、「まあまあ、悪くない夢だったな」と、思うことがある。

間。

里砂　　同じように。――この人生が終わったあとも、悪くない夢だったな。ああ、「私」っていうコンテンツは、まあまあ、面白かったな、って。――そう思えたらいい。たとえばそれが、ものすごい悪夢だったとしても。あるいはかなり平坦で、ものすごく退屈なものだったとしても。それは、多分、その程度の話で。

一拍。

里砂　　朝、君が目を覚ました時に、おはよう、と声をかける相手が近くにいるのだとして、――こんな夢だったよ、と報告する誰かが、そばにいるのだとして、――君は、この夢を、どんな夢だったと報告するんだろう。

兵藤　　まあまあ、悪くない夢だったよ。

里砂　　って報告するような、そんな夢にこれは、なっていたのだろうか？

里砂、客席を見渡して。

里砂　　本日はご来場ありがとうございました。えー、おしまいです。

里砂、本を閉じる。

群舞。

幕

【参考文献】

安楽死を遂げるまで　宮下洋一
私の夢はスイスで安楽死　くらんけ
だから、もう眠らせてほしい　西智弘
安楽死・尊厳死を語る前に知っておきたいこと　安藤泰至
生きるための安楽死　シャボットあかね

欧米に寝たきり老人はいない　自分で決める人生最後の医療　宮本顕二　宮本礼子
大往生したけりゃ医療とかかわるな　中村仁一
大往生したけりゃ医療とかかわるな【介護編】　中村仁一
「平穏死」のすすめ　口から食べられなくなったらどうしますか　石飛幸三
「平穏死」を受け入れるレッスン　自分はしてほしくないのに、なぜ親に延命治療をするのですか？　石飛幸三
平穏死の１０の条件　長尾和宏
痛くない死に方　長尾和宏
男の孤独死　長尾和宏
思い通りの死に方　中村仁一　久坂部羊
死ぬ瞬間　Ｅ・キューブラー・ロス
安楽死のできる国　三井美奈
日本人の死に時　久坂部羊
認知症の人が安楽死する国　後藤剛
Final exit　安楽死の方法　デレック・ハンフリー
安楽死で死なせてください　橋田壽賀子
死を求める人々　ベルト・カイゼル
美しいままで　ネーダーコールン靖子
死もまた愉し　結城昌治
長生き地獄　松原惇子
この世からきれいに消えたい。　宮台真司　藤井誠二
ゲンロン０　東浩紀
日本人はなぜキツネにだまされなくなったのか　内山節
新美南吉『てぶくろをかいに』『ごんぎつね』
ナンシー・ウッド『今日は死ぬのにもってこいの日』